ISSN 1883-9924

甲南英文学

No.40 2025

甲南英文学会

ISSN 1883-9924

甲南英文学

甲南英文学会

編集委員
(五十音順、＊印は編集委員長)
杉浦裕子　＊浜本隆三

目　次

── 研究論文 ──

ロアルド・ダールの作品における
主人公の残虐性・・・・・・・・・・・・・・・　山並　華奈江　1

── 書評 ──

Pumla Gobodo-Madikizela. *A Human Being Died That Night: A South African Woman Confronts the Legacy of Apartheid*. Boston: Mariner Book, 2003. ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　上林　朋広　19

── 研究ノート ──

ハンナ・リデルの訃報を報じた
記事情報の集約・・・・・・・・・・・・・・・・・　浜本　隆三　25

言語理論とは何についての理論なのか・・・・・　中谷　健太郎　37

── 報告 ──

甲南英文学会 40 周年記念講演会報告・・・・・　池本　陽向　59

ロアルド・ダールの作品における主人公の残虐性

山並華奈江

SYNOPSIS

Roald Dahl (1916-1990) is a British writer who is a popular author of children's books and his works often depict some kinds of violence. Regarding his expressions of violence, his texts have been interpreted that an adult villain is cruel. Some critics, however, claim that protagonists have savage attitudes in the stories. I argue for the latter opinion and examine Dahl's three works *James and the Giant Peach* (1961), *Danny the Champion of the World* (1975), and *Matilda* (1988) to analyze how protagonists' cruel attitudes are depicted and how these protagonists influence their allies or family. These perspectives will clarify the point that protagonists imitate their antagonists' savage attributes. In *James and the Giant Peach*, James's attitude toward his allies reminds us of Aunt Sponge and Spiker's mistreatment. In *Danny the Champion of the World*, Danny supports his father to rob of Victor Hazell's authority. In *Matilda*, Matilda deceives her parents, especially her father Mr Wormwood, and headmistress Trunchbull to revenge them. Dahl's works imply difficulty in the extinction of the people's cruel attribute.

1. はじめに

1942 年から最晩年の 1990 年まで作家活動を続けたロアルド・ダール(Roald Dahl, 1916-1990) は、*Charlie and the Chocolate Factory* (1964)、*Danny the Champion of the World* (1975)、 *The BFG* (1982)、 *The Witches*

(1983)、 *Matilda* (1988) などベストセラーの児童文学を生み出してきた作家である。しかしダール作品はしばしば物議を醸すものとなっており、低俗、暴力的な表現、大人を軽蔑しているといった批判がある[1]。暴力的な表現に焦点を当ててみると、敵役に回る大人は子供に対して虐待や他者を軽蔑するといった攻撃的な態度をとり、さらに主人公の子どもたちにも残酷な面が見られる。先行研究ではダール作品において残虐性を持ち合わせているのは敵対する大人であるという見解と、主人公である子どもに残虐性を見出そうとする解釈の両方がみられる。例えば安藤聡は『マチルダは小さな大天才』の分析の中で、敵対する大人を「親や教師など子供に対して何らかの権力を持ちそれを濫用する者たち」とみなしている[2]。しかしクリステン・ゲストは主人公マチルダと、彼女の敵対関係である大人トランチブルとの間の類似点を挙げており、両者共に気に入らない相手に対してサディスティックな態度をとっていると解釈している[3]。『おばけ桃が行く』の分析においては、ヘザー・ワーシントンは残酷な面を持つのは叔母 2 人であると分析している。そしてこの復讐は主人公ジェイムズによってではなく、語り手によって遂行されるものであり、残酷な大人は現実世界でも罰せられるべきだという事を示唆していると捉えている[4]。一方でマーク・I・ウェストはジェイムズを乗せた大きな桃が、彼に暴力を振るっていた叔母二人を潰してしまう場面を取り上げている。この二人の死の場面はジェイムズの殺意の表れだと述べ、主人公である子どもの登場人物に残虐性を見出している[5]。本論では先行研究で挙がっていた主人公にも残虐な面があるという解釈を踏まえた上で主人公が持つ残虐性がどのように表現されているかについて考察していく。そして残虐性を持ち合わせた主人公が彼らの仲間や家族にどのような影響を及ぼしていくかを分析する。取り扱う作品はいずれも、子

どもを軽蔑する大人と主人公との関係が描かれている 1961 年出版『おばけ桃が行く』(*James and the Giant Peach*　以下 *JGP*)、1975 年出版『ダニーは世界チャンピオン』(*Danny the Champion of the World*　以下 *DCW*)、1988 年出版『マチルダは小さな大天才』(*Matilda*　以下 *M*) の 3 つの物語である。

2. 大人が持つ残酷さを模倣していく主人公たち

ダールは 1916 年にイギリス・南ウェールズ地方ランダフの町で生まれ、7 歳の時にランダフ大聖堂小学校 (Llandaff Cathedral School) に入学した。9 歳の時学校で体罰を受けたことをきっかけにイングランドのセント・ピーターズ校 (St. Peter's School in Weston-Super-Mare) に転校するが、その後も教師や監督生から暴力を受けることがあった[6]。「ロアルド・ダールが書いた子どもの本には、子どもたちがひどいいたずらをして大人をへこます話が、たくさんある。これはもしかしたら、寄宿学校でひどい目にあわされた、そのうらみを果たしているのかもしれない」 (ポーリング 43) とクリス・ポーリングが述べているように、ダールは作中で大人を打倒する子どもを描くことによって自身にもカタルシス効果を与えていると捉えられる[7]。ジェレミー・トレグロウンはダールが少年時代他の男子生徒からいじめられていた経験を踏まえて短編'The Swan' (1977) に登場する男子学生のいじめっ子たち、*JGP* のスポンジおよびスパイカー、後期の作品である *The BFG* (1982) の巨人たち、 *Matilda* に登場するマチルダの父親、トランチブル、ダールの死後出版された *The Minpins* (1991) のドラゴンにいじめの要素が落とし込まれていると分析している (Treglown 24)。この様にダールは少年時代嫌悪していた大人を作品のモデルにしていたと考えられるが、次に論じるよう

に主人公が持ち合わせている残酷さを分析してみると、大人が持つそれと類似している事が分かる。

2-1.『おばけ桃が行く』について

先述したように叔母 2 人を桃で潰してしまう場面に主人公の殺意の表れがあるという先行研究もあるが、別の描写からどのような残虐性があるのかここでは探ってみたい。

『おばけ桃が行く』の主人公である 7 歳の少年ジェイムズ・ヘンリー・トロッター (James Henry Trotter)は 4 歳のときに両親を失い、2 人の叔母に愛情を受けずに育てられる。ある日、老人からもらった魔法の粉を誤ってこぼしてしまったことからジェイムズの家がある丘に大きな桃ができ、その中にいた虫たち (Centipede, Earthworm, Glow-worm, Ladybug, Miss Spider, Old-Green-Grasshopper, Silkworm) とイギリスからアメリカまで桃に乗って冒険をする。最後にジェイムズはセントラル・パーク内で桃の種を家にして幸せに暮らすという物語である。『おばけ桃が行く』では外見も醜く、性格も冷酷な主人公ジェイムズの叔母、スポンジ (Aunt Sponge) とスパイカー (Aunt Spiker) が登場する。彼女たちは物語の序盤だけしか登場しないが、それでもその残虐ぶりは十分に伝わる。この 2 人の叔母は普段からジェイムズを名前で呼ばず、「むかつくガキ」(disgusting little beast) などと侮辱していた (*JGP* 2) 。スポンジとスパイカーはジェイムズに虐待をする。例えば夏の炎天下の中、ジェイムズに丸太割をさせるが、 “‘Stop that immediately and get on with your work, you nasty little beast!’ Aunt Sponge ordered.” (*JGP* 9) とジェイムズが労働をしている自分の不幸に涙を流しても作業を休むことは許されていない。しかし、大きな桃が叔母とジェイムズの家の丘にできたとき、その桃を鑑賞しに来る人達から料

金を取り、金稼ぎを始めたときはジェイムズを邪魔者扱いし、働かせようとはしなかった。このことから 2 人の叔母は自分たちの都合がいいように子どもを働かせたり、のけ者にしたりするなど利己的な性格を持ち合わせている。

一方で主人公はどのような残酷さを持ち合わせているのだろうか。虫たちと桃に乗って冒険していくとき、ジェイムズは集団の指揮をとる。そのときにジェイムズの残酷さが垣間見えてくる。海を渡っている際、サメが桃を食べ始める。沈没を防ぐため空を渡る方法に変えようとジェイムズが案を出す場面がある。どのようにカモメを捕まえるのかとテントウ虫がジェイムズに尋ねると、ジェイムズは次のように答えた。

> “With a worm, of course. Seagulls love worms, didn’t you know that? And luckily for us, we have here the biggest, fattest, pinkest, juiciest Earthworm in the world.” (*JGP* 72)

ミミズを囮にしてカモメをおびき寄せ、何百匹も捕らえて桃を気球のように浮かせようとする。この時ミミズにとっては自分の命を危険にさらすことになる。ミミズは物事を悲観的に捉える傾向があり、仲間との関係に水を差すことがあったため生贄として選ばれたとも考えられる。一方でジェイムズは指示を出す立場でミミズの命を一顧だにしない。ミミズに囮になってもらい、近づいてきたカモメを蚕と蜘蛛の糸で捕まえる。しかし何百羽も捕える必要があるので蚕と蜘蛛は疲弊してくる。

> “Silkworm says she’s running out of silk!” yelled the Centipede from

below. “She says she can’t keep it up much longer. Nor can Miss Spider!”

“Tell them they’ve *got* to!” James answered. “They can’t stop now!” (*JGP* 78; emphasis in original)

「蚕と蜘蛛はこれ以上糸が出せない」とムカデが言うがジェイムズは続けろと無理を強いる。これは前述したようにジェイムズが薪割りを中断すると「休まず続けろ」と怒るスポンジの姿と重なる。

ジェイムズは叔母 2 人と生活していた頃、肉体労働を強いられ心身共に苦しい思いをしてきた。虫たちと冒険する間ジェイムズは従う立場から虫たちに指示を出す立場に変わる。その指揮の取り方に注目してみると叔母のジェイムズに対する態度を模倣している事が分かる。

2-2.『ダニーは世界チャンピオン』について

『ダニーは世界チャンピオン』では主に主人公ダニー、その父親ウィリアム、彼らと対立関係にあるヴィクター・ヘイゼル氏が登場する。この親子とヘイゼル氏の間には階級格差が原因で軋轢が生じている。ここではその身分差に焦点を当てながら主人公がどのように仕返しをしていくのかを考察する。

『ダニーは世界チャンピオン』では主人公ダニー (Danny) と父親ウィリアム (William) の 2 人で幌馬車に暮らしていた。ダニーが 9 歳になったとき、父親が密猟をしていることを知り、ショックを受けるが、父親があまりにも愉快そうに密猟の話をするため、ダニーは狩りに行くときに自分に報告することを約束するなら行ってもいいと密猟を許すようになる[8]。その後ダニーも密猟に参加し、ヴィクター・ヘイルズ氏 (Mr Victor Hazell) の森からキジを全部盗ろうと戦略を立てる。

まずヴィクター・ヘイルズ氏の分析をしていく。彼は権力で他者を

抑圧しようと試み、また、自身の階級より下の身分のものを見下している。小さな給油所の経営と自動車の修理を行うダニーの父親とダニーは質素な生活送るワーキング・クラスである (*DCW* 2)。それに対し、ヴィクター・ヘイルズ氏はビール醸造人で醸造所を経営し、地主でもあるアッパー・ミドルクラスである (*DCW* 44)。ウィリアムが経営する給油所の周りだけは彼の土地だが、その周辺はヘイルズ氏が所有する土地が広がっている (*DCW* 44)。ヘイルズ氏はダニーとウィリアムの態度が気に入らず、保健所の役人を送り込み不衛生のため人が住むのを禁じていると言って検査をしたり、ガソリンを調べて混ぜ物が入っていないか調査したりするなど彼らの不正を見つけて追い出したいと考えていることが読み取れる (*DCW* 44-48)。ダニーたちを退かすことができればヘイゼル氏が持つ領土の拡大が可能になることも彼らの居住地を調査する要因の一つとして挙げられる。

ヘイルズ氏がダニーの父親が経営する給油所に来たとき、ダニーが給油をしようとすると、「汚い手であちこち触るな」と言う (*DCW* 45)。ヘイルズ氏は高級車であるロールスロイスに乗って登場する (*DCW* 46)。彼が車に乗ってダニーの父親を見るが、その軽蔑した見方が父親の怒りを買う (*DCW* 93)。ヘイルズ氏自身が裕福であることを誇示してダニーたちとの格差を表している。ヘイルズ氏の車やダニーたちに対する振る舞いはダニー親子が決して裕福ではないことを知らしめているかのようである。

次に主人公ダニーの分析をしていく。ダニーは父親がヘイルズ氏の森で密猟をするのは彼を嫌っているからだと知る (*DCW* 44)。年に一度開かれるヘイゼル氏のキジ猟には公爵、伯爵、男爵、準男爵、金持ちの実業家など裕福な人々が来る (*DCW* 93-94)。彼らはヘイゼル氏の事を嫌悪しつつも、キジを狩るには南イングランドで一番優れた狩猟

場を持っている彼の元へやってくるのだとダニーの父親は考えている (*DCW* 94)。その何百人と集まるパーティを頓挫させることでヘイゼル氏の面目を潰そうとする (*DCW* 96)。ヘイルズ氏が猟のパーティを開いた際にキジがいなかったら彼はどんな反応をするのだろうかと父親がダニーに話す場面で "'Just imagine, Danny,' [. . .] 'And Mr Victor Hazell's face would be redder than a boiled beetroot! Now wouldn't that be the most fantastic marvellous thing if we could pull it off, Danny?'" (*DCW* 96-97) と言う。父親はキジを奪いヘイゼル氏に惨めな思いを味あわせたかった。その考えをダニーも受容する。ヘイゼル氏がダニーたちを見下すように、ダニーもその父親もヘイゼル氏を軽蔑している。ヘイルズ氏の森にいるキジに睡眠薬が埋め込まれているレーズンを食べさせて奪う。ヘイルズ氏はダニーたちが犯人だと責め寄り憤慨している間にキジは睡眠薬の効果が切れて飛び立っていった。"[Pheasants] had flown in exactly the opposite directions [of Hazell's Wood]!" (*DCW* 199) と飛んでいく方向がヘイルズ氏の森と反対の方向であることが面白いと主人公ダニーの視点から記されている。自分が懲らしめたいと思っていた人の不幸を喜んでいる事がここから分かる。

以上からヘイゼル氏は自身が裕福でダニーとウィリアムが貧しいという事実を顕示している。それに対しダニーは父親を援助する形でヘイゼル氏からキジを奪う事で彼の権威を剝奪し、ミドルクラスのヘイゼル氏の身分を相対化してアッパー・クラスの人とヘイゼル氏との間に格差を生み出そうとしている。

2-3.『マチルダは小さな大天才』について

最後に『マチルダは小さな大天才』を分析していく。マチルダは『おばけ桃が行く』のジェイムズや『ダニーは世界チャンピオン』のダニ

ーに比べ、大人に対する怒りがより顕著に表れている。ジェイムズとダニーはそれぞれ叔母スポンジ、スパイカーあるいはヴィクター・ヘイゼル氏に対する怒りや憎しみの心理描写は少ないが、マチルダの場合敵対する大人に対して憤りを覚え、どのように復讐するのか考える描写がある。その点に注目しながらも彼女がどのようにして敵対する大人に報復するのかを考察していきたい。

『マチルダは小さな大天才』は知性あふれるマチルダ・ワームウッド (Matilda Wormwood) という少女が、自分を冷遇する家族や暴虐な校長アガサ・トランチブル (Agatha Trunchbull) に対して知性や魔法を使って立ち向かっていく話である。まず家族間に焦点を当ててみると、マチルダの両親は娘に対して無関心で彼女が頭脳明晰であることに全く気付かない。特に父親であるハリー・ワームウッド (Harry Wormwood) はマチルダを無知な少女だと思い込んでいる。彼は自動車の売買業者をしているが、壊れたギア・ボックスにおがくずをいれて走らせるようにした車を販売するなど、いかさまをして商売をしていた。マチルダは不正直だと咎めるが無知のお前には分からないと逆上される。マチルダは父親に対する仕返しを考え、話すオウムを暖炉の煙突に隠して幽霊がいると脅かしたり、母親の染毛剤とヘアオイルを入れ替えて父親の髪の毛を銀色に変えてしまったりする。気が動転している父親に対してマチルダは間違って母親の染毛剤を取ったのではないかと言う。不正直だと父親のことを軽蔑していたマチルダだったが、彼女もまた嘘をつくことによって反撃している。

そして学校内でもマチルダは理不尽な大人と対峙することになる。敵対する相手、トランチブルの特徴としては女子生徒の髪型が気に食わないと言って教室から投げ飛ばす、男子生徒の頭を皿で叩くといった点から怒りに任せて暴力を振るっている事が挙げられる。また、自

分の意見に反論を許さない。暴力で自身の権力を誇示したり、子どもの意見を無視したりしている事が分かる。ではそのトランチブルに対して主人公マチルダがどのように復讐していくのか。マチルダが念力を使えるようになる場面がある。トランチブルに「水差しにイモリを入れたのはマチルダだ」と言われ濡れ衣を着せられた時の心情が、“Matilda felt herself getting angrier . . . and angrier . . . and angrier . . . so unbearably angry that something was bound to explode inside her very soon.” (*M* 164) と表されている。マチルダは耐えられない怒りを感じ、念力を使ってトランチブルの方にコップを倒す。この怒りに耐えられない様子はトランチブルにも描かれている。憤慨しているトランチブルを表す表現として “this great red-necked giant” (*M* 89) や “‘She’s [Trunchbull] turning redder and redder’” (*M* 130) など red が使われるが、マチルダが初めて念力を使う場面でも

> The Trunchbull was in such a rage that her face had taken on a boiled colour and little flecks of froth were gathering at the corners of her mouth. But she was not the only one who was losing her cool. Matilda was also beginning to see red. (*M* 162)

というようにマチルダも怒りで顔が赤くなり red が使われている。

また、マチルダの担任教師であるジェニファー・ハニー (Jennifer Honey) がマチルダという優秀な生徒がいることをトランチブルに伝えようとするがトランチブルは聞く耳を持たない。トランチブルはマチルダを非行少女だと決めつけ “‘I have discovered, Miss Honey, during my long career as a teacher that a bad girl is a far more dangerous creature than a bad boy’” (*M* 85) と主張している。一方でマチルダも“‘No, I don’t

think she's [Trunchbull] mad,' […] 'But she's very dangerous'" (*M* 118) とトランチブルを狂気じみてはいないが危険な人物として認識している。この様にマチルダとトランチブルは対立する立場でありながらも両者が同じ表現を使っている。さらにマチルダが秘めている残虐さもトランチブルのそれと類似している。それはマチルダのトランチブルへの復讐した結果から見て取れる。マチルダは手に入れた念力を使って、黒板にトランチブルの義弟 (ミス・ハニーの父親) マグナス (Magnus) だと名乗り、ミス・ハニーを解放しろと書く。トランチブルはその場で気絶してしまい、その後姿を消す。"Later that day, the news began to spread that the Headmistress had recovered from her fainting-fit and had then marched out of the school building tight-lipped and white in the face." (*M* 227; underline added)という文から分かるように、トランチブルは学校を出るときロをきつく結んでおり、命令によって人を抑圧しようとする力が奪われてしまっている。生徒たちもトランチブルからの詰問や、命令されたとき、気が動転、あるいは恐怖でどもり口調になってしまう。被支配者側の生徒たちと同じようにトランチブルも自分の意見がうまく言えなくなっていることが明らかである。男子生徒ブルース・ボッグトロッター (Bruce Bogtrotter) がトランチブルにケーキを盗み食いしたことを問い詰められたとき "'I never did,' the boy [Bogtrotter] exclaimed, turning from grey to white." (*M* 121; underline added) と顔面蒼白になっている。トランチブルもマチルダの復讐によって恐怖のあまり血の気が引いている。トランチブルが悪役として描かれる要素の一つに思い込みで相手が悪いと決めつけ罵倒する事が挙げられる。一方的に相手を罵れるのは彼女が校長という立場で自身の権力を振りかざすことができるからだ。マチルダも復讐を成功させるため念力というトランチブルには到達できない力と、ミス・ハニ

ーの父親でもあり家の主であったマグナス、言い換えれば家父長的な力を組み合わせて立ち向かっている[9]。その結果トランチブルに今まで抑圧されてきた子どもたちと同じ恐怖を味あわせていることからマチルダも彼女と同じような残虐性を持ち合わせているといえる。

この様にマチルダは敵対する大人を嫌悪しながらもその復讐方法は彼らの行為と重なるのである。

3．主人公たちがもたらす仲間への影響

3 つの作品上では主人公の子どもたちが敵対する大人たちと類似した残酷さを持ち合わせていることが分かった。この主人公たちは彼らの仲間や家族にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

『おばけ桃が行く』では、ミミズを囮にしてカモメを捕らえようと案を出した場面でミミズはその意見を拒否するが、ムカデが「君の意見はどうでもいい」とジェイムズの意見を支持している (*JGP* 72)。ミミズの立場を考えてくれるキャラクターはいない。多数の命を救うために個の意見が無視されている。登場人物は「殉教者としてミミズを敬う」と多数の命のための犠牲を英雄的な行為として捉えているが、誰も代わりになると手を上げていない。ジェイムズの提案がミミズ以外のキャラクターに自分たちが生き残ることだけを考え、利己的な判断をさせている。

『ダニーは世界チャンピオン』ではダニーの父親がヘイルズ氏の森に忍び込んだ際に落とし穴にはまり、足に傷を負う。病院に行き、家に帰った後、父親はダニーに「10 月の初めにヘイゼル氏の森で狩りのパーティが開かれる。そのキジを奪いたい」と打ち明ける。ダニーはそのキジを盗るための策を提案する。父親が怪我をしたことで密猟をやめるよう説得も可能なはずだが続ける道に誘導させている。そし

て共に戦略を立て密猟に参加することでダニーは父親のサポートをして仕返しを成功させようとする。父親の幸福を優先していることによって社会的な善悪を見落としている。結果父親も密猟を続けることになる。

『マチルダは小さな大天才』ではミス・ハニーは初めてマチルダの才能を知ったとき、トランチブルにマチルダの飛び級を勧める。トランチブルはマチルダの才能を信じず、ミス・ハニーの提案を却下するが、ミス・ハニーは諦めることはなかった。"'I am going to do something about this child', she [Miss Honey] told herself " (*M* 89) というようにマチルダの才能がより発揮できる環境を作ろうと教師として介入できる範囲でサポートを試みる。しかし、マチルダによるトランチブルへの復讐が成功した後ワームウッド夫妻の仕事のいかさまがばれて、家族でスペインに逃亡することになる。マチルダは家族とではなく、ミス・ハニーと共に生活したいと懇願する場面がある。

> "I don't want to go with them!" Matilda shouted suddenly. "I won't go with them."
>
> "I'm afraid you must," Miss Honey said.
>
> "I want to live here with you," Matilda cried out. "Please let me live here with you!"
>
> "I'm only wish you could," Miss Honey said. "But I'm afraid it's not possible. You cannot leave your parents just because you want to. They have a right to take you with them." (*M* 236)

ミス・ハニーはマチルダを引き取ることを一度は断るが、最終的には一緒に暮らすことになる。ミス・ハニーの家族間の問題を解決した

マチルダに対し、今度はミス・ハニーが教師と生徒の垣根を越えてマチルダの望みを叶えている。親権の関係上ワームウッド夫妻についていかなければならないという社会通念よりもマチルダへの恩返しが優先される。

ここから主人公たちの仲間や家族は自らの行為が適切かどうか省みず、もしくは自分の意見を最後まで押し通せず主人公の意見に流されている事が分かる。

4. おわりに

ダールの初期から後期にわたって描かれる主人公の子どもの持つ残酷さといったものは敵対する立場の大人の行為を踏襲したものだという事が分かった。また主人公たちと関わる中で彼らの仲間、家族にも道徳心の欠落や社会通念を後回ししている事が伺えた。『おばけ桃が行く』ではジェイムズの虫たちへの指揮の取り方を考察することでジェイムズは叔母の命令を模倣していると捉えられる。『ダニーは世界チャンピオン』では階級が違うという観点からダニーとウィリアムはヘイゼル氏から見下されていた。ダニーは父親を援助する形でキジ猟の開催を阻み、ヘイゼル氏がアッパー・クラスの人々から注目を集める機会を奪おうと試みる。それによりダニーたちと同様にヘイゼル氏もより身分が上の者から軽蔑される経験を味わわせようという魂胆が見える。『マチルダは小さな大天才』ではマチルダが両親やトランチブルを嫌悪しながらもその非難している要素を取り入れながら仕返しをしている。大人と子供の対立関係が前景化されている背後で、主人公たちは大人が持つ残酷な面を軽蔑しながらも、その残虐性を自身の内面に組み込んでいく。ダール作品では人間が持つ残酷さの根絶には限界がある事が読み取れる。

注

[1]ロアルド・ダールの経歴、作品の批評については Butler, 1-2 頁、Culley, 59 頁、West, *Roald Dahl.* ix, 19-20 頁参照。

[2]安藤、185-86 頁。大人に対抗するマチルダについては「相手が醜態を晒すよう仕向けて笑いものにするという手段に訴える」というように主人公の子どもを批判的には捉えていない (190 頁)。またこの論文では *Matilda* のテーマと して読書の重要性と物語の意義が据えられていると論じている (190 頁)。

[3]Guest, 251-52 頁参照。Guest は *Matilda* でのミス・ハニー、マチルダ、トランチブルをメインにキャラクター分析を行っている。

[4]Worthington はダール作品の中でどの様な場面で登場人物が暴力や犯罪を行っているかについて分析をし、その表現が子どもの読者に適しているのか大人の方が適しているのかについて論じている。ジェイムズの分析については 126 頁参照。

[5]West は“Regression and the Fragmentation of the Self in *James and the Giant Peach*”で *James and the Giant Peach* を取り扱い、ジェイムズが安全な場所への回帰から再び自尊心を獲得するまでの過程を精神的分析によって論じている。例えばジェイムズが桃の中に入っていく場面は子宮への回帰を切望していることの表れだとしている (220-21 頁)。スポンジ、スパイカーの死の場面の分析については 222 頁参照。

[6]ダールの子ども時代については Dahl, *Boy*、Treglown, 10-28 頁、West, xi, 3-5 頁、富田、5-23 頁、ポーリング、5-47 頁。

[7]Worthington もカタルシス効果について分析し、読者にカタルシス効果を与えていると指摘している。124 頁参照。

[8]West は *Roald Dahl* の中で *Danny the Champion of the World* での密猟が肯定的

に書かれていることについて、全ての社会的規則が適応されるとは限らないことへの示唆を論じている。またテクストにおいて、読み手は社会的規則や慣習に従うよりも家族愛や親切心を行動に移すことの方が重要であるという印象を受けると主張している (79 頁)。

[9]Guest もマチルダが家父長的な力を持ち合わせていると論じている。248 頁参照。

参考文献

Butler, Catherine. “Introduction.” *Roald Dahl*, edited by Ann Alston and Catherine Butler, Palgrave Macmillan, 2012, pp. 1-13.

Culley, Jonathon. “Roald Dahl— ‘It's about Children and It's for Children’—But Is It Suitable?” *Children's Literature in Education,* vol. 22, no. 1, 1991, pp. 59-73.

Dahl, Roald. *Boy: Tales of Childhood*. Puffin, 2001.

---. *Danny the Champion of the World*. Puffin, 2001.

---. *James and the Giant Peach*. Puffin, 2013.

---. *Matilda*. Puffin, 2007.

Guest, Kristen. “The Good, the Bad, and the Ugly: Resistance and Complicity in *Matilda*.” *Children's Literature Association Quarterly*, vol. 33, no. 3, 2008, pp. 246-57.

Treglown, Jeremy. *Roald Dahl: a biography*. Faber and Faber, 1994.

West, Mark I. “Regression and the Fragmentation of the Self in *James and the Giant Peach*.” *Children's Literature in Education*, vol. 16, no. 4, 1985, pp. 219-25.

---. *Roald Dahl*, Twayne, 1992.

Worthington, Heather. “An Unsuitable Read for a Child? Reconsidering Crime and Violence in Roald Dahl’s Fiction for Children.” *Roald Dahl*, edited by Ann Alston and Catherine Butler, Palgrave Macmillan, 2012, pp. 123-41.

安藤聡「ロアルド・ダール—文学論としての『マティルダ』」、『なぜ英国は児童文学王国なのか—ファンタジーの名作を読み解く』、平凡社、2023 年、

182-203 頁。
ダール、ロアルド『おばけ桃が行く』、柳瀬尚紀訳、評論社、2006 年。
ダール、ロアルド『少年』、永井敦訳、早川書房、1989 年。
ダール、ロアルド『ダニーは世界チャンピオン』、柳瀬尚紀訳、評論社、2013 年。
ダール、ロアルド『マチルダは小さな大天才』、宮下嶺夫訳、評論社、2014 年。
富田泰子『ロアルド・ダール』、KTC 中央出版、2003 年。
ポーリング、クリス『ダールさんってどんな人？』、灰島かり訳、評論社、2007 年。

Pumla Gobodo-Madikizela. *A Human Being Died That Night: A South African Woman Confronts the Legacy of Apartheid*. Boston: Mariner Book, 2003.

上林朋広

白人男性が右手を差し出す。友好のしるしとして。舞台は南アフリカ。時は 1997 年。民主化後、国民間の和解が熱心に追求されていた時期だ。握手の場面は、融和の象徴として、アパルトヘイト時代に犯した罪を問う本書の末尾に置かれてもおかしくはない。しかし、本書において握手は、はじまりにすぎない。

次に二人が会った時に男性は言う。「あなたが触れたのは、引き金を引く手だったんだ」と（39）。現在に至るまでこの発言から逃れることはできていないし、この発言が与えた深い衝撃を弱めることはできていない、と彼女は書く。邪悪な存在に触れるという本書のテーマが凝縮された箇所だ。時代は民主化直後の南アフリカであり、監獄での面会で想起されたアパルトヘイト時代の記憶、そしてその記憶が体現する過去に向き合うことをめぐる思索が本書の内容である。

著者のプムラ・ゴボド＝マドキゼラ（Pumla Gobodo-Madkizela）は現在南アフリカのストレンボッシュ大学で「歴史的トラウマと社会変革」の教授職（chair）を務める心理学者である。ゴボド＝マドキゼラは、1994 年の体制転換後に実施された真実和解委員会で職員として働きながら、悪に触れること、それも「第一の悪（prime evil）」と呼ばれ、体制の悪を象徴する存在と考えられていたユージン・デコック（Eugen De Kock）にインタビューを実施し、彼との会話を契機とする和解についての洞察を記す。デコックは反体制の活動家の拷問や暗殺を担っていた秘密部隊のトップを務めていた人物である。ゴボド＝

マドキゼラの繊細な筆致は、デコックが自分が他者に与えた痛みを認識し、許しを乞う、そのことによって人間性を回復する過程に就くまでを描いていく。200 ページに満たない本ではあるが、読後感は重い。真実和解委員会については、多数の研究書が書かれており、翻訳されたものも多い[i]。しかし、ユージン・デコックというアパルトヘイト時代の悪を象徴するような人物を叙述の中心に置くことで、本書は和解の難しさ、あるいは和解や赦しを目指すことは本当に望ましいのかという本質的な問いを提示する。南アフリカを事例として「和解」について考察した数多くの類書と本書を分けるのは、本書の対象がデコックという一人の人物に焦点を合わせたことにだけあるのではない。著者が時に見せる和解や赦しへのためらいこそが本書をより価値のあるものにしている。

デコックが彼女と同じ人間であること、そして同時に他者を、彼女と同じ黒い肌の人々を躊躇いなく殺していったこと。その事実が、著者を困惑させる。しかし、本当にデコックは人間なのだろうか。反アパルトヘイト活動家の拷問と殺害を担い、何人殺してきたか数えることも忘れてしまった人物は、人間性を失ってしまったのではないだろうか。著者は自身に、そして読者に問いかける。

デコックは南アフリカ警察で、C10 という活動家の誘拐、拷問、殺害を担う部門のトップであり、フラクプラースと呼ばれる警察が買い上げた農場で日夜拷問を繰り返した。フラクプラースで「業務」を担っていた人々を対象とする真実和解委員会の公聴会でデコックは彼の被害者の遺族と直面する。公聴会の場でデコックは、彼の被害者の未亡人たちに直接謝罪したいと申し出る。大胆な申し出は著者を驚かせる。彼は何を言うのだろう。「あなたたちの夫を殺してすみません」だろうか、と彼女は思う（14）。しかし、デコックと対面することを

受け入れ、実際に面会したフク夫人とムゴドゥーカ夫人の話を聞いた著者は、彼女自身がデコックに直接会うことを決意する。夫人たちが、デコックと会ったことで心を動かされ、彼の謝罪を受け入れ、彼を許そうとしたからだ。フク夫人は、「彼の手を握り締め、彼に未来があることを、彼がまだ変わることができることを示したい」と思ったと著者に伝える(15)。

著者ゴボド＝マドキゼラは、収監中のデコックにインタビューを申し込み、面会する。面会は数を重ね、インタビューは合計約 40 時間に及んだ。インタビューは徐々にデコックの生涯と彼の思想を明らかにしていく。デコックがいかに一介の警察官から拷問・暗殺部門のトップに「昇進」していったのか。なぜ彼がアパルトヘイト体制が永続すると信じ、活動家を殺すことを遂行すべき仕事であると考えていたのか。デコックとの会話は、著者を思索へと導く。著者は、デコックにエンパシーを抱く。と同時に、デコックに、彼女と同じ黒い肌の人々を殺害し、黒人を抑圧する体制の維持のために裏仕事をしてきたデコックに、共感し、彼の感情を理解しようとする。その試み自体が非人間的な行為なのではないかというためらいも生じさせるのではあるが。

彼女自身が、デコックに対して相反する感情を持つと認めながらも、インタビューを進めるにつれて著者は、デコックへの赦しの必要性を認める立場へと傾いていく。その転機となったのは、アメリカでの精神分析学の国際学会で、デコックのインタビューをもとに発表を行なった時だと著者は指摘する。質疑応答で、デコックが著者を「操っている」という可能性はないのかという考えようによっては意地悪な質問を遮るかのように、手を挙げて発言したのは、反アパルトヘイト運動家のアルビー・サックスであった。自身も暗殺の試みの対象となり、

個包爆弾で腕を吹き飛ばされたサックスは、デコックのような人物のなかに「人間性」を見つけることに、新生南アフリカの未来はかかっているのだと述べる（45）。

デコックへのインタビューを契機として著者は、さまざまな思索を各章で展開する。ナチスドイツと比較し、人々はなぜ罪の意識を抱かずに殺すようになるのかを考え（第４章）、トラウマを伝える言葉のなさに呻吟する（第５章）。人々を人種によって分けることを根幹とするアパルトヘイト体制の下で、自分たちのコミュニティすなわち白人たちを守るために拷問や暗殺を行ってきたデコックが自分の行為を悪と認め、苦しむ場面は本書の一つのクライマックスだろう。デコックは著者に「わたしはあなたの友人や家族を殺してしまったことがあるだろうか」と問いかける（114）。自分の行いによって苦しむ人がいることを認識し、そのことによって苦しむこと。この点に、著者はデコックの人間性の回復の可能性を見出す。

苦しみや精神的な葛藤を中心に、アパルトヘイト時代の罪を問う本書の記述は、アパルトヘイト後の国家再生のための和解という政治的な文脈からは遠く離れており、あくまでも個人に焦点を合わせる。それでも、真実和解委員会やアパルトヘイト時代の罪をめぐる重要な著作である本書は、日本語に訳されていないにも関わらず、また刊行から 20 年以上経っているにも関わらず、紹介に値する。この本がアパルトヘイトの時代を生きると言うことはどのような経験だったのかを理解する上で、欠かせない本となっているからだ。人種隔離政策では、「他者」の死は悼まれることがなかった。デコックという人物を通して、著者はこれまで敵対してきた人々が、お互いの共通の人間性を認識しつつ、共に歩んでいく可能性を問いかける。本書は、死を悼むことなく暴力に突き進む時代にこそ重要性を増す本である。

Pumla Gobodo-Madikizela. *A Human Being Died That Night: A South African Woman Confronts the Legacy of Apartheid*. Boston: Mariner Book, 2003.

---

[i] 南アフリカの真実和解委員会に関して日本語で書かれた研究書としては、阿部利洋『紛争後社会と向き合う：南アフリカ真実和解委員会』（京都大学出版会、2007 年）を挙げることができる。翻訳された本は多いが、筆者はアフリカーナーの詩人アンキー・クロッホが取材を重ね、民衆の視点から真実和解委員会を描いた『カントリー・オブ・マイ・スカル: 南アフリカ真実和解委員会「虹の国」の苦悩：ルポルタージュ』（現代企画室、2010 年）がもっとも重要な成果であると考えている。

研究ノート

ハンナ・リデルの訃報を報じた記事情報の集約

浜本隆三

はじめに

ハンナ・リデル(Hannah Riddell 1855-1932)は英国ロンドン生まれのイギリス人女性宣教師である。1889 年、父ダニエル(Daniel)・リデルの死をきっかけにキリスト教伝道をこころざし、1889 年 12 月、英国聖公会宣教協会（Christian Missionary Society: CMS）の宣教師として日本に来日した。翌 1890 年、熊本に赴任したリデルは、そこで熊本市郊外にある本妙寺の境内に集う身寄りのないハンセン病者たちを目にし、救済活動に取り掛かる。リデルは当初、牧崎にて簡易の治療所を設けていたが、1895 年、回春病院として本格的な私設のハンセン病療養所を立ち上げるにいたる。

1895 年 11 月に落成した回春病院は、教会やハンセン病菌研究所などの設備を拡充していった。患者は常時 50 名ほどを収容し、多いときには 60 名が入院していた。寄付によってまかなわれていた病院の運営は容易ではなかったが、1907 年に日本がらい予防法を導入し、全国 5 カ所に国立のハンセン病療養所を設立して以後も、リデルは回春病院を私設療養所として運営し、ハンセン病者の治癒に生涯を捧げた。

リデルの評価をめぐっては、日本のハンセン病者救済の「母」として神格化される一方、定期的に東京に出向いては豪華なホテルに滞在し、夏は避暑地を軽井沢に求めたことで、彼女の豪奢な浪費ぶりを難じる人もいる。ただ、おおむねは従来、見て見ぬふりをされてきた路傍に集うハンセン病者に手を差し伸べ、弱者救済の道を実践を以て示

してみせた人格者との評価で一致している。

リデルの神格化にとりわけ寄与したのは、イギリス人作家のジュリア・ボイドである。彼女は、回春病院の設立に際して、リデルと CMS、および英国聖公会の九州管区の宣教師エヴィントン(Bishop Evington)や熊本宣教を担当していたジョン・ブランドラム(Jhon Brandram)との確執を全面的に描き出し、リデルの偉業を際立させてきた。[i]こうして日本のハンセン病者に尽くしたリデル像が築かれたわけであるが、同時代の社会からの評価については、また別の見方が存在する可能性もある。[2]

リデルは 1932 年 2 月 4 日、77 歳で亡くなった。リデルの訃報は、日本とイギリスでほぼ時を同じくして、北米大陸ではしばらく経過してから報じられた。これら世界各地に散在する訃報は、これまでのところ個別に現地のアーカイブに出向いて探し出す作業を必要とした。だが、オンラインのアーカイブが整えられるなかで、ウェブ上で横断的に収集することが可能となってきた。[3]

本稿の目的は、ハンナ・リデルの訃報記事についての情報をオンライン上で収集し、内容を整理する点にある。訃報記事の存在は、当人の生前の人物評価を知れるだけでなく、当人が社会および広くは世界にとってどのような存在であったのかを物語る指標である。海外で報じられた訃報記事は、ロイター通信が配信した情報に基づいて書かれているが、地域によっては通信社の配信記事にはない独自の情報が盛り込まれていたりする場合がある。そのような、一見すればささいな情報の片鱗が、じつのところ、リデルと地域との独自のネットワークを示唆していると理解することもできるはずである。

リデルの訃報記事について、日本の情報は朝日新聞、毎日新聞、読売新聞のアーカイブを、英字新聞については *The Japan Times* のアー

カイブを活用した。海外の情報については、アメリカの新聞記事アーカイブである newspaper.com および newspaperarchive.com とイギリスの新聞記事アーカイブである britishnewspaper.com、さらにアメリカの議会図書館である Library of Congress のアーカイブ記事のサイトを活用した。

I. 日本の訃報記事

『朝日新聞』が 1932 年 2 月 4 日に報じたところによれば、ハンナ・リデルの没時の役職は回春堂病院長で、２月３日午後１時 15 分、熊本市新屋敷町の自宅で姪のライトらに見守られて逝去した。熊本からの「電話」によってもたらされた情報による『朝日新聞』の写真付き訃報記事では、リデルの出自、病院開設、これまでの患者 1663 人、藍綬褒章を受章、終身奨励金を受ける身であったことなどの情報が記されている。他方、『読売新聞』の記事は、本文わずか 7 行ほどで簡単にリデルの訃報を伝えている。

The Japan Times の記事は訃報の第一報からリデルの功績を詳しく伝えている。速報で草津での救済活動に触れているのは世界でも *The Japan Times* だけである。2 月 7 日の記事は時事新報による配信の情報が紹介されている。5 月 6 日の記事では神田のＹＭＣＡにおいてリデルの追悼集会が催される旨、告知されている。1933 年 2 月 7 日の記事は寄付を募る告知と、共鳴して寄せられた寄付者への謝辞が記されている。

今回は『熊本日日新聞』等、地方紙や地元紙の情報を収集することは叶わなかったが、地元紙を別にすると *The Japan Times* は継続的にリデルの没後の動静について伝えている。在日外国人のあいだではよく知られたリデルを、*The Japan Times* が継続して取り上げていること

は納得がいくが、他方、邦語新聞のリデルについての取り上げ方はいささか寂しいものである。

日付	新聞名	地域
2/4	『朝日新聞』	全国版
2/5	『読売新聞』	全国版
2/5	The Japan Times	全国版
2/7	The Japan Times	全国版
5/6	The Japan Times	全国版
1933/2/7	The Japan Times	全国版

II.　海外の訃報記事：イギリス

イギリスでの訃報記事は 22 報、うちリデルが没した翌日の 1932 年 2 月 4 日に報じられたものは 15 通であった。[4] 記事は基本的にロイター通信による東京からの配信情報に基づいて書かれているとみられ、見出しこそまちまちであるが、中身はほぼ同じ。すなわち、ロンドン生まれのリデルは 1890 年に日本へ渡り、熊本の本妙寺に集ったハンセン病者を目にして病者の治癒に身を捧げる決意をして病院開設を思い立ち、1895 年に回春病院（Hospital of Resurrection of Hope）を開設したこと、1905 年には皇室から褒章（the order of Blue Ribbon）を受けたことが記されている。これらの情報のうち、一部のみを紹介した短報もいくつかみられた。

イギリスの訃報記事の特質としては、いずれも同一の通信社（おそらくロイター社）による配信記事の情報に頼っている点、短い限られた期間に掲載されている点が挙げられる。リデルの母国であるため、

彼女に関する情報が追加されても良いように思えるが、配信記事の情報以外、目立った内容はみられなかった。リデルの訃報を素早く伝えるという点に情報の価値を見出されたからであろうと想像されるが、他方でリデルおよび回春病院との縁が強い地域や組織があれば、後述する北米のように続報が出てもおかしくないはずである。リデルの訃報記事に続く続報が出ていない点を重視するならば、回春病院とイギリスとの関係はそれほど強固ではなかった可能性がうかがえる。ただ、オンライン上のアーカイブに全ての新聞記事が掲載されているわけではないため、早計に結論するわけにはいかないだろう。

日付	新聞名	地域
2/4	Evening Chronicle	Tyne and Wear
	Manchester Evening News	Lancashire
	Dundee Evening Telegraph	Angus, Scotland
	Coventry Evening Telegraph	Warwickshire, England
	Leicester Evening Mail	Leicestershire, England
	Edinburgh Evening News	Midlothian, Scotland
	Hull Daily Mail	Yorkshire, England
	Hartlepool Northern Daily Mail	Durham, England
	Belfast Telegraph	Antrim, Northern Ireland
	Newcastle Evening Chronicle	Northumberland, England
	Grimsby Evening Telegraph	Humberside, England
	Evening Despatch	Warwickshire, England
	Huddersfield Daily Examiner	Yorkshire, England
	Hull Daily Mail	Humberside, England

	South Wales Evening Post	West Glamorgan, Wales
2/5	Daily Express Yorkshire Post and Leeds Intelligencer Daily News (London) The Guardian The Times	London, England Yorkshire, England London, England Greater London, England London, England
2/6	Liverpool Daily Post	Lancashire, England
2/12	Witness (Belfast)	Antrim, Northern Ireland

III. 海外の訃報記事：アメリカ

アメリカでのリデルの訃報は『ボルチモア・サン』紙を除いて見つからなかった。この理由ははっきりしていない。1907 年にリデルが訪米したときも、カナダではリデルの訪問を盛んに報じていたが、アメリカではほぼ報じる新聞はなかった。これはリデルが訪米旅行に出る前、大隈重信に宛ててアメリカの知人を紹介するよう頼んだ手紙で、大々的に寄付を募るようなことはしないと約束していたことが影響している可能性があるが、それだけが理由ではないようにも思える。[5]

『ボルチモア・サン』紙がリデルの訃報を掲載したきっかけは、読者からの投書による。読者が直接、熊本から連絡を受けてリデルの訃報を知ったというのである。例年よりもカレンダーの送付が遅くなったのはリデルが没したためだと書き添えられていたため[6]、日々の糧(Daily Bread League)のカレンダーを送るタイミングで、リデルの訃報が伝えられたものと推測できる。

その後、『ボルチモア・サン』紙はリデルの功績を伝える記事、リデルとボルチモアとの地縁について説明する記事、リデルの追悼集会が催される告知記事、追悼集会の報告記事をそれぞれ掲載した。同紙の訃報記事を見ると、アメリカでは国際通信社による記事が利用されていなかったようにも思われる。同地の地元紙がリデルについてこれほど熱心に報じていることからも、国際通信社から訃報情報が配信されていたら、取り上げていたはずである。このあたりの事情は判然としないため、今後の課題としたい。

日付	新聞名	地域
2/14	The Baltimore Sun	Baltimore, Maryland
2/21	The Baltimore Sun	Baltimore, Maryland
2/23	The Baltimore Sun	Baltimore, Maryland
2/24	The Baltimore Sun	Baltimore, Maryland

IV. 海外の訃報記事：カナダ

カナダにおけるリデルの訃報記事の特質としては、掲載時期が遅く、また内容もまちまちであるという点が指摘できる。2 月 20 日の記事は、ロンドンで報じられたリデルの訃報を引いている。内容もロイター通信の配信記事を 50 語程度に絞ったものとなっている。

表の*2 印の記事は同じ内容のものである。3 月 29 日付の記事では、ジュリア・バーベリー(Julia Barberry)とリデルが亡くなったことについて、ジョン・M・ヘイ婦人(Mrs. John M. Hay)が言及した旨、記述があるが、詳しい情報は述べられていない。ヘイ婦人については、周辺の記事を調べたところドルカス会(Dorcas Society)の主事(secretary)であるとの情報が確認できている。[7]

つづいて、4 月 6 日付の記事は、ハンナ・リデルが没したとの「噂」が流れているが、これについて確かな情報をもっている人はいないか、尋ねる形で記事が掲載されている。したがって、リデルの訃報に関する詳しいことは報じられていない。以上の内容より、同地でリデルの訃報は新聞とは異なる組織的・個人的なネットワークによってもたらされていたことが理解できる。

日付	新聞名	地域
2/20	The Ottawa Journal	Ottawa, Ontario
3/21	Lacombe Globe*1	Lacombe, Alberta
3/29	Saint John Times Globe*2 Telegraph-Journal*2	Saint John, New Brunswick Saint John, New Brunswick
4/6	Telegraph-Journal*2 Saint John Times Globe*”	Saint John, New Brunswick Saint John, New Brunswick
4/7	Drumheller Review*2	Drumheller, Alberta
4/8	Irma Times*1	Irma, Alberta
4/21	The Lloydminster Times*1	Lloydminster, Alberta
4/27	The Expositor	Brantford, Ontario
4/28	Langley Advance*1	Langley, British Columbia
5/6	The Hamilton Spectator	Hamilton, Ontario
7/9	The Hamilton Spectator*1	Hamilton, Ontario

*1 この 6 紙の記事は内容だけでなく形式も同じであるため転載された記事だと判断できる。

*2 この 2 紙の記事は同じ。

V. 海外の訃報記事：オーストラリア、中国

上海と香港の新聞は ProQuest Historical Newspapers にて検索した。この両紙、およびオーストラリア紙の内容はロイター社が東京から配信した記事の内容とほぼ同じである。リデルは 1916 年、上海に駐留するアメリカ人婦人会で講演を行うために出向いていた。香港へはイギリスからの送金に使っていた銀行との取引のために、何度か出向いていたようである。これらのきっかけにより、当地と地縁があったものと推測できる。

オーストラリアについては、リデルが訪問したという記録は見つかっておらず、おそらく訪問はしていないものと思われる。リデルの没後、第二次大戦中、リデルの姪であるライトが戦禍の日本を逃れるために選んだ避難先がオーストラリアであったが、どのような地縁があったのかはまだはっきりしていない。

日付	新聞名	地域
2/5	The China Press	Shanghai
2/9	South China Morning Post	Hong Kong
3/31	The North Western Courier	New South Wales, Australia

まとめ

以上、集めた記事の情報を集約すると、国内 6 本、海外 42 本で、国別にはイギリス 22 本、カナダ 13 本、アメリカ 4 本、オーストラリア 1 本、中国（上海・香港）2 本となっている。

リデルの没後、日本では大手紙が報じたが、海外ではロイター社配信記事がイギリスで報じられた。北米での訃報は 2 月 14 日に入ってようやく報じられた。おそらくロイター社の配信記事は長崎から上海

経由で海底ケーブルを通ってイギリスへと配信されて、その後、イギリスの新聞に掲載されたリデルの訃報記事がアメリカへと伝わり報じられたという流れが予想される。

今後の課題としては、とくにアメリカのメリーランド州ボルチモア、およびカナダ東部でのリデルの訃報の報じられ方について掘り下げる必要があろう。ボルチモアでは、リデルの訃報に際して、独自の追悼集会を催している点が興味深い。またカナダ東部では、リデルについての個人的なネットワークが示唆されていた。これらの記事の主変情報を収集することにより、リデルが欧米旅行によって築いたネットワークの一端を垣間見ることができるばかりか、回春病院がどのような寄付のネットワークによって支えられていたのか明らかにできるのではないかと考えている。

---

*本研究は科学研究費助成事業（研究課題:23K09541「ハンナ・リデルの北米講演旅行とハンセン病支援体制」）より研究助成を受けて遂行した。

[1] リデルについて論じた邦語文献である猪飼隆明『ハンナ・リデルと回春病院』でも、猪飼はボイドの路線を踏襲し、リデルと CMS との確執を際立させた論を展開している。
[2] ジュリア・ボイドおよび猪飼隆明によるリデル像と異なる見方の可能性については、また稿を改めて検討したい。
[3] ただし、アーカイブに登録されている新聞に限られる。
[4] 上述の通り、オンラインのアーカイブに入っていない新聞社の記事は多数存在しているものと思われる。

[5] リデルは 1907 年の渡米前、大隈重信に宛てて以下のように書いている。

> アメリカ滞在中は好志ある人々の客間を借りて、少数の方にでも癩病患者救済の重要性を説き、回春病院のこともお話しするつもりでおります。／もっとも、広く公衆に訴えて寄付金を集めたり、新聞に公告を出して宣伝したりするようなことは、決してしないつもりでおります。／つきましては、アメリカの有力者やその他の知人の方々へ一言ご紹介していただけませんでしょうか。(猪飼隆明『ハンナ・リデルと回春病院』p. 210)

[6] 1932 年 2 月 4 日付『ボルチモア・サン』紙より。
[7] たとえば 1927 年 2 月 2 日(水)付の Telegraph-Journal の 12 頁には "2 Dominion Board Officers to Attend Diocesan Annual"との見出しの記事のなかで、Mrs. Hay がヴェールを寄贈した「インディアン・ミッション・スクール」からお礼の手紙が届いた旨、報告している。同会が篤志活動を行っていたことが理解でき、回春病院とのネットワークがあったことが推測できる。同氏についてはさらに情報を収集していきたい。

参考文献

猪飼隆明『ハンナ・リデルと回春病院』熊本出版文化会館、2005 年。
内田守他編『ユーカリの実るを待ちて：リデルとライトの生涯』リデル・ライト記念老人ホーム発行、1990 年。
Boyd, Julia. *Hannah Riddell: An Englishwoman in Japan*. Charles E. Tuttle Company, 1996. (『ハンナ・リデル：ハンセン病救済に捧げた一生』吉川明希訳、日本経済新聞社、1995 年。)

研究ノート

言語理論とは何についての理論なのか

中谷　健太郎

1. はじめに

表題に対して、言語についての理論に決まっているじゃないか、と言う声が聞こえてきそうだ。しかし「言語」をヒトの認知機能に結びつけて考えるならば（そしてそうするべきである）、言語理論をヒトの認知機能の中にどう位置付けるかという問題には真剣に向き合わなければならない。

今回この研究ノートを執筆しようと思ったきっかけは、日本言語学会の第 169 回大会で「Presupposition accommodation の観点からみたテオクとテシマウの非対称性」（中谷, 2024b）という表題でポスター発表したときの聴衆とのやりとりである。この発表はどういう内容だったかというと[i]、たとえば「宿題をやっておく」と「宿題をやってしまう」の違いを考えると、前者は準備、後者は完了のような意味[ii]で捉えられるが、それらの意味は本動詞のオク・シマウの意味、特に移動の着点の意味から派生していると考えられる。つまり、オクは「平面に設置する」という意味で、シマウは「長期保存を前提に閉所に設置する」という意味なので、アクセス性に関して対照的だと考えられる。平面におけば、誰でもアクセスできるし、長期保存のための閉所に入れるとアクセスしにくくなるわけなので、その意味拡張として、「宿題をやっておく」＝「宿題をやってその帰結にアクセスできるようにする＝準備」に対して、「宿題をやってしまう」＝「宿題をやってその帰結にアクセスできないようになる＝自分の手からは完全に離れ

た」というニュアンスになるというわけである。こういったことは先行研究でもしばしば指摘されているが（寺村, 1984; Ono, 1992; 梁井, 2009; Nakatani, 2013; 中谷, 2024a, 2025）、もしテオクとテシマウの違いが、着点の違いに還元できるのであれば、その着点解釈以外については同じふるまいになっても良いはずである。しかしその予測に反して、テオク・テシマウには以下のような非対称性が見られる（中谷, 2024b）。たとえば、テオクには意図性が要求されるが、テシマウにはそのような制約はない（Ono, 1992）。

(1) a. 書類を（*不注意で）捨てておいた。
b. 書類を（不注意で）捨ててしまった。

また、非対格動詞はテオクと相性が悪い。

(2) a. 旗を倒しておいた。 / *旗が倒れておいた。
b. 旗を倒してしまった。 / 旗が倒れてしまった。

結局のところ、テオクには意思性が必要だがテシマウはそうでもない。この非対称性は、着点の違いからすぐには説明できない。ではなぜこの違いがあるのか。

この問題に説明を与えようとする試みが中谷(2024b)のポスター発表の主眼で、簡単にいえば、テオク、テシマウという言語表現の使用には聞き手にコンテキストの前提の想定と受け入れを強要する（このような現象を前提適応 presupposition accommodation[iii]という：Beaver, 1997; Potts, 2005; など）。たとえば「鍵をあけておいた」なら「ああ、誰か入室必要だけど鍵をもっていない人がいるんだろう」とか、「花

瓶を割ってしまった」なら、「花瓶はきっと大切な、もしかしたら高価なものだったのだろう」などといった背景を前提として聞き手は想定する。そして、着点解釈の違いから、テオクは「事態の帰結について、話者も含めて誰でもアクセス容易になるようにする」という解釈、テシマウは「事態の帰結について、話者も含めて誰もアクセスできなくなる」という解釈が選好される。しかし、後者については、

(i) x takes an action

(ii) x causes its consequence to go into an inaccessible place

(iii) nobody including x cannot retrieve it

という流れでは、どういう背景があるのか、なぜ(iii) x 自身にも取り返しが付かないように、(ii) x がしたのか、もっともらしい前提を想定しにくい。リスはどんぐりを地面に埋めて場所を忘れて掘り出すことができなくなることがあるというが、ヒトはリスではないので、健常者であればそのような状況を想定しにくい。

しかし、(ii)に x が関与していないとなると一気に前提の想定と受容が容易になる。

(i) x takes an action

(ii) its consequence goes into an inaccessible place

(iii) nobody including x cannot retrieve it

つまり、(iii)が x に不利な状況を生むので、(ii)に x が絡んでいないという解釈のほうが、聞き手にとって解釈が容易だということである。こういう、前提適応のしやすさという語用論の要請によって、テシマウにおける意図性の削除が駆動される、というのが中谷(2024b)の発表の主旨だった。

このポスター発表について、聴衆の 1 人から、「意図性の削除が駆動されるというのは、共時的な説明として果たして成り立つのか、通

時的な文法化の説明というのなら分かるけれども」というようなコメントをもらった。こういった質問は、思い起こせば 10 年以上前にも Nakatani (2013)のテ形複雑述語の意味派生の提案に関して、別の方からされたことがある。筆者はしばしば述語の意味分析について動的な派生をもとにした説明を提案するが、すると、「いやそれは文法化（通時変化現象）じゃないのか」「それは共時的な意味計算なのか」と言われる。

テ形複雑述語の意味論を「文法化という観点」（のみ）で分析することの問題点については、中谷(2015)を参照いただきたいが、本研究ノートでは、逆に本当に「共時的な計算」と考えうるのかという、しばしば向けられる問題提起について考えてみたい。上記例について言えば、確かにテシマウ構文を発したり理解したりするにあたって、いちいち「前提の想定のしやすさ」を考慮して、「設置事象の動作主を削除する」といった過程を踏むとは考えにくい。その意味で、「通時変化にすぎないのではないか、共時的な計算なのか」といった疑問が向けられるのはある意味もっともだという側面はある。

2. 時間の概念のない派生は有り得るのか

しかし、よく考えてみると、「その派生は共時的な計算として存在するのか？」といった疑問は、「派生」を仮定するあらゆる言語理論に対して向けられてもおかしくない。たとえば生成文法の「派生」は実時間の言語運用を直接的に反映していないことは明らかである。このように生成文法における派生に時間の流れがないことについて、問題提起がなされることはあっても（Ferreira, 2005; Jackendoff, 2011; Sag & Wasow, 2011; Phillips & Lewis, 2013; Hunter, 2019, to appear; など）、大きな議論には発展していないようである。しかし、それは派生の「無

時間性 atemporality」について議論に値しないことを意味しない。どちらかというと、この問題について等閑視されている状態であるように思える。そこでまず、統語派生の無時間性についてどのような潜在的な問題があり、どのような解決が提案されているのかを概観したあと、語用論がからむ意味派生の「無時間性」について考えてみたい。

2.1. 統語派生と無時間性

文法理論の主たる目標は「文法性」を説明することであり、「文法性」を説明する理論とは言い換えれば「文法的な文とそうでない文を体系的に区別できる理論」のことである。生成文法は、この目標を、文法的な文のみを派生的に「生成」する計算システムによって達成しようとする文法理論である（Chomsky, 1957, 1965, 1981, 1986, 1995）。文の「生成 generation」という概念が文の「産出 production」をイメージさせるが、生成文法における文の「生成」は数々の派生ステップを踏むとはいえ、静的な言語知識を成す計算アルゴリズム（の実現？）であって、言語運用として実時間に沿ってなされる「産出」とは異なる。

問題は、「派生」という動的な説明を持ち出している以上、時間的な解釈がつきまとうことにある。V と NP を併合によって VP という句を形成し、さらに *v* や主語名詞句を併合して *v*P を形成し、時制 T を併合して TP を構築するといった派生ステップを踏むならば、VP ができるのが *v*P より先で、*v*P ができるのが TP ができるより先であるわけだが、普通の考えのもとで「先」というと、「時間的に先行している」という意味であるように思えてしまう。時間的な先行関係がない「派生」とはいったい何なのか。

この派生生成システムが、記述のためのツールにすぎないのであれ

ば問題がないと言えるかもしれない。たとえば、論理学者や、形式意味論研究者の多くは、論理や意味の記述に関心があるのであって、彼らが用いる形式体系について、心理的・生物学的な実在性については生成文法のような強固な仮説はないように思う[iv]。記述としての形式言語という点では、物理学において現象を記述するのに数式が使われるのと似ている。

ところが、生成文法においてはこの計算システムが認知システムに埋め込まれていると考えるのが一般的である[v]。すなわち、言語の計算システムは意味・音声に関する認知機構に接しており、計算システムの役割はそのインターフェイス（それぞれ概念-意図 Conceptual-Intentional または C-I、および調音-知覚 Articulatory-Perceptual または A-P と呼ばれる）に対し、「教示 instruction」を与えると仮定されている[vi]。さらに、極小主義（Chomsky, 1995）に基づく標準的な生成文法理論では派生の特定フェーズごとに、意味・音声の運用システムへの出力（Multiple Spell-Out）が仮定されている。すなわち、ここで仮定される計算システムは、研究者による現象の記述の方便ではなく、心理的・生物学的に実在する仕組みということである。

そうなると、生成文法で仮定されている計算が「派生のステップ」を仮定しつつ、各ステップに「時間的な先行関係」は仮定されていないということが、どのような整合性を持っているのかについて、疑義が生じるのは当然である。ヒトが実時間上の運用ではこの計算システムに従わないとしたら、いったいいつ人はこの計算のステップを踏むのだろうか？

一つ考えられるのは、派生の最終的産物としての統語表示のみが問題であって、派生でブロックされるケースは表示に対する適格性制約の適用として捉えるという可能性である。たとえば *wh* 疑問文におけ

る下接の制約（subjacency）を、表示に対する制約として考え、派生のステップを考えないという可能性である。

(3) a. *What$_i$ do you wonder [whether John bought e_i]?
b. What$_i$ do you think [e_i that John bought e_i]?

上記例では、節をまたいだ *what* と *e*（空範疇）の「同一指標付けの条件」として、*e* を包摂する最初の CP の Spec に中間痕跡を設定できること、といった表示に対する条件を課すことにより、派生ステップを仮定せずに構造的制約として説明できる。この考え方においては、派生というのは説明のための方便となり、実際は最終的な表示だけですべてが説明できることになる。このような可能性は Phillips & Lewis (2013)や Hunter (2019, to appear)、Sag & Wasaw (2011)でも言及されている。

考えてみれば、形態論における派生に基づく構造分析も、同様に派生のアウトプットとしての構造表示を考えれば動的な派生を仮定せずとも事足りる。例えば言語学の教科書などでよく例として挙げられる unlock の構造的曖昧性は、派生的に説明できるが、最終的な構造表示だけを見ても同様に説明可能である。

(4) a. [lock]
b. [lock-able]
c. [un-[lock-able]] （施錠できない）

(5) a. [lock]
b. [un-lock]
c. [[un-lock]-able] （開錠できる）

すなわち、階層性に関しては、(4a)→(4b)→(4c)/(5a)→(5b)→(5c)というように派生的に考えることができるものの、必ずしも動的なステップを考慮する必要はなく、最終的な構造表示（上記例では(4c)/(5c)）だけで必要十分の情報が含まれている。

2.2. 統語派生の認知システムにおける位置付け

これを念頭においた上で、代表的な先行研究でどのような議論があるのかを紐解いてみる。Phillips & Lewis (2013)は、生成文法のように文法理論を「計算システム」として特徴付ける場合、それは、実際にこの計算プロセスの流れを踏む心理的システムが存在するという意味なのかという問いを提示し、（生成）文法家はあまりこういった話題を議論するのに積極的ではないが、という前置きをした上で、大きく分けて、以下の 3 つのタイプの返答が得られるとしている。まず、literalist（文字通り解釈主義）で、この立場では、文法は、実時間上の言語理解・産出の構造構築システムと並んで話者が持つ構造構築システムの 1 つとされる。Phillips & Lewis は、この立場は認知的な仮説としては非常に明快だが、経験的証拠を見つけることは困難であると述べている。前節で述べた通り、派生の時間性と処理の時間性に齟齬があるからである。

もう 1 つのタイプは、formalist（形式主義）で、この立場では、文の構造は、派生の連続として捉えることもできるが、実際には静的な構造表示の集まりとしても考えられる。実際に派生のステップを踏んでいると「捉えることもできる」だけで、派生ステップをその順番で踏んでいなければならないということを意味しない。そして、文を構成する構造表示の集まりのいくつかが、実時間における言語理解・産

出において実際に構築される可能性を否定しない。この立場は上記(3), (4), (5)で例示したようなアプローチに相当すると考えられる。Phillips & Lewis によれば、この立場は出版された論文の形で主張されることは少ないが、非公式な議論の場ではしばしば聞かれる立場だと言う。

最後のタイプは extensionalist（外延主義）で、この立場においては言語理論を適格文のみを出力とし不適格文を出力しない関数として捉える。言い換えれば、その関数の外延がすべての適格文、そしてそれら適格文のみを含むということである。この関数の外延は文の集合であり、文構造の集合ではないから、この関数に基づく文法は逐次的な言語運用とは関係のない抽象的な記述ということになる。意味論で言えば、形式意味論は伝統的には非明示的にそのような立場を取っていると考えられ、たとえば動詞の意味を、その出力を真にするような入力の集合だと捉えたとして（例としては、動詞 smoke の denotation を「タバコを吸うすべての人の集合」と仮定するとか)、それはヒトが実際に動詞の意味を集合として規定しているということを主張しているわけではなく、そのように仮定すれば文全体の真理条件をただしく構成的に規定できるということである。

Phillips & Lewis (2013)は、文法理論の外延主義について、以下のように述べている。

> “By claiming that it is merely an abstract characterization of a function that generates the grammatical sentences of a language, it places itself beyond the reach of most empirical evidence, aside from acceptability judgments.”

曰く、外延主義の立場で文法を捉えるということは、すなわちこれまで（心理言語学において）蓄積されてきた経験的証拠の「外側」に自らを置くことを意味する。なぜなら、外延主義は完成された文の文法性の理論にすぎないため、心理言語学で蓄積されてきた実時間における逐次的言語処理に関する知見に対し、何の貢献もできないということになるからである。（唯一の例外は容認性判断に関する知見である。）

さらに Phillips & Lewis (2013)は次のように述べている。

> "If one takes this position seriously, then the individual components of a grammatical theory should be understood as having no independent status as mental objects or processes, as they are merely components of an abstract function, rather than components of a more concrete description of a mental system. Despite this, we encounter many extensionalist theories nowadays that appeal to notions of 'efficiency' and 'computational economy' of derivations, in ways that are hard to reconcile with the notion of an abstract functional description."

本当にそういう外延主義の立場を取るならば、文法は実在する心理システムの具体的な記述ではないということになる。しかるに、こんにちの外延主義的理論では、しばしば派生の「効率性」や「計算の経済性」といった心理的な運用プロセスに関係すると思われる概念をもちいた説明が見られ、そこに一種の矛盾が潜んでいるというわけである。

たとえば、いわゆる言語能力 linguistic competence と言語運用 linguistic performance の違いを説明する例として以下のような中央埋め込み文が挙げられる。

(6) a. The nurse was not helpful.

b. The nurse [the doctor hired] was not helpful.

c. The nurse [the doctor [the patient criticized] hired] was not helpful.

いずれも文法的な文であり、生成文法においても生成されうる文である。すなわち、生成文法の外延集合の要素である。しかし、二重中央埋め込みの(6c)は実際には理解が非常に困難な文である。(6c)の容認度の低さは文法的要因ではなく、言語運用システムの処理資源の限界に起因するというのは、ほとんどの研究者が同意するところである。逆に言えば、(6c)が文法的に問題がないということはすなわち、文法自体は運用システムの処理資源の限界にはとらわれないということである。しかるに、一部の文法理論が「効率性」や「経済性」といった、運用システムの最適化に関わる概念を取り入れるのはダブルスタンダードではないか。Phillips & Lewis (2013)からの上記引用はそのような批判として解釈できよう。Phillips はこのジレンマを解決するアプローチとして、実時間処理にも発動可能な、左から右に構造を構築する文法理論を提唱しているが（Phillips, 1996, 2003, 2006, など)、理論言語学、心理言語学どちらにおいても主流の考えにはなっていないようである。

次に、この問題について積極的に論文を発表している Tim Hunter の主張を紐解いてみよう。Hunter (2019) は統語理論を表示理論 representational theory と派生理論 derivational theory の 2 種類に分けることができるとしている。表示理論は制約ベースであり、すべての制約に従えばその表示は適格とされる。これは Phillips & Lewis (2013)の言う formalist の立場に相当する。表示理論の心的な立ち位置は比較

的明らかで、解釈にせよ産出にせよ、言語運用の際に処理システムがこれら静的な構造制約に目配せすると考えれば良い。表示理論における制約は表示に対する制約であって派生に依存するものではないので、言語運用における実時間処理との齟齬は起こらない可能性が高い。いっぽう、派生理論は構造の適格性が派生プロセスそのものによって規定されるとする。この立場を Phillips & Lewis のいう literalist として解釈すると、経験的に支持することが難しく、extensionalist として解釈すると、心理的プロセスとしての実在性から乖離してしまい、いずれにしても問題が残る。

統語派生の心理システムとしての実在性について、Phillips & Lewis も Hunter も動的な派生プロセスを捨てない解決法（後者については後述）を提案しているが、単純に考えるともっとも問題が小さいアプローチは、派生ステップを動的なプロセスと考えずに構造表示に対する制約と考える formalist（形式主義）の立場である。心理言語学においては、実時間上でさまざまな要因（意味論、語用論、音韻論、頻度、文脈など）が制約となって処理を導くことが知られており、文法を制約として解釈した場合、心理的なモデルにそれを組み込むことは容易であり、実在性を主張することにも問題はないだろう。

2.3. 語用論駆動の派生の formalist 解釈は可能か

では話を 1 節に戻して、中谷(2024b)で主張したような、テオクとテシマウの意図性に関する非対称性の、語用論ベースの派生的な説明が、formalist な説明として解釈できるかを考えてみる。ポイントとなる、テシマウの意図性の欠如を可能にする派生プロセスは、簡単に言えば以下のようである。

(7) a. VP テシマウの使用は聞き手に前提適応を強要する
b. VP 事象を自らの手で回復不能にする動機は、前提として設定しにくい
c. シマウの動作主削除が発動される
→^{OK}「書類を不注意で捨ててしまった」

この派生プロセスが上述した統語論における派生や形態論における派生と本質的に異なるのは、(7c)の形式面での派生結果を駆動するのが(7a-b)における語用論的な要請によるものであるという点である。それに対し、統語論的派生や形態論的派生を駆動するのは、形式の要請によるものである。こういった「形式の要請によって駆動される構造表示の派生」を「構造表示に対する制約」として解釈すること（=formalist）は多くの場合可能である。例えば非文法的な(3a)に戻って、構造派生を考えると、以下のようになる。

(8) a. [bought what]
b. [$_{TP}$ John bought what]
c. [$_{CP}$ whether [$_{TP}$ John bought what]]
d. [wonder [$_{CP}$ whether [$_{TP}$ John bought what]]]
e. [$_{TP}$ you wonder [$_{CP}$ whether [$_{TP}$ John bought what]]]
f. [do [$_{TP}$ you wonder [$_{CP}$ whether [$_{TP}$ John bought what]]]]
g. *[$_{CP}$ what$_i$ do [$_{TP}$ you wonder [$_{CP}$ whether [$_{TP}$ John bought e_i]]]]

ここで(8f)から(8g)のステップに進めないのは、埋め込み節 CP に what が立ち寄れる場所がなく、一般に移動は TP を 2 つ一気にまたぐことができないから、というように派生の観点から説明することができる。

しかし、(8a-f)のステップを無視して、(8g)に対して、「節境界を 2 つ挟んでの what と *e* を同一指標付けすることはできない」という構造に対する制約としても解釈できる。それは、(8a-f)のステップの履歴が(8g)にも（四角括弧などによって）反映されているからである。

しかし、他方、「語用論の要請によって駆動される構造表示の派生」を「構造表示に対する制約」として直接的に解釈することはできない。なぜなら、上記(7)の例で言えば、(7c)を構造表示のアウトプットとして考えるとしても、(7c)の構造表示には、(7a, b)の履歴が不可視であるからである。構造派生ステップの履歴は構造に反映しうるが、語用論推論は構造とは異なるレベルで行われるので、語用論派生の履歴は構造には反映しないのである。

つまり、中谷(2024b)における派生の仮説を formalist として解釈することはできない。いっぽう、語用論派生が実時間でいちいち駆動されると考えることも難しい。すなわち、literalist な捉え方も難しい。さらに、意味論的派生なら外延主義 extensionalist を採ることも可能だが、語用論推論に駆動される派生はそのように考えることが難しい。なぜなら、(7)の語用論推論は前提の適用・受け入れという聞き手側の推論に基づくものであるので、extensionalist のように「文の派生は部分を成す単語・形態素に付随する情報を用いて構成的に計算できるものであり、心理的プロセスとは独立している」と主張することはできないからである。つまり、語用論に基づく構造の派生は、統語論に基づく構造の派生よりも、さらに問題含みであるという結論になりかねない。

3. 言語獲得装置としての言語理論

前節の問題を解決するのに示唆的なのは、派生操作の適用頻度を、

実時間処理におけるサプライザル（Hale, 2001; Levy, 2008）に寄与するパラメータの１つとして設定するという Hunter (2019)の主張である。文における入力 w_i に対するサプライザル（Hale, 2001; Levy, 2008）とは、それまでの入力 $w_1 \ldots w_{i\text{-}1}$ とコンテキストから予想される w_i の出現確率の負の対数に比例すると仮定され、確率が高ければサプライザルは低く、確率が低ければサプライザルは高くなる（≈処理負荷が高くなる）。

(9)　surprisal at $w_i \propto -\log P(w_i \mid w_{1\ldots i\text{-}1}, \text{CONTEXT})$

Hunter (2019)によれば、このモデルにおいて、$w_{1\ldots i\text{-}1}$ をもとにして次の単語に割り当てられる確率分布を設定する際に、派生ステップを含めた構造的複雑性が寄与する可能性が考えられる。すなわち、実時間処理を線形単語列における確率分布と考え、統語派生自体が確率分布を設定するパラメータの一つを成すとすれば、統語派生理論を実在する認知システムの中に位置付けることができるというわけである。そうだとすれば、出力が同じでも派生の履歴が違う 2 つの統語理論は、異なる確率分布を設定することになり、それをもとに心理言語学的実験などによって、どちらの理論がより妥当かを検証することも可能となる。統語的派生の動的なステップを仮定しつつ、同時にそれを認知システムの中に位置付けることができるということである。

しかし、これよって派生の無時間性と言語処理の時間性の問題が解決したとしても、結局統語派生のステップがあることが前提となっていることには変わりない。一体ヒトはいつ、動的な統語派生に基づいて確率分布を調節するのか。ボトムアップの「統語派生の履歴」がトップダウン的な「実時間予測処理の確率分布」に反映されるとしても、

どのような過程を経て反映されるのか、Hunter (2019)は明示していない。これについて本稿では、それが行われるのは言語習得の過程であるとするのが合理的であると考える。

近年、大規模データでトレーニングされた大規模言語モデル(LLM)が驚くほどの精度でヒトの言語の再現・生成を行えることが知られている。計算機の性能の飛躍的な向上により LLM は膨大な数のパラメータの最適化ができるようになったが、それがヒトの言語能力の近似と言えるのか、議論が必要である。ただ、LLM のパラメータ設定とヒトの言語獲得について間違いなく異なる点は、入力となるデータのサイズである。

LLM は数百億から数兆のトークン（≈単語）をトレーニングの入力とするが、ヒトが臨界期までに耳にする言語入力はそれよりはるかに少ない。もちろん、ヒトが得る入力は、視覚情報や社会的コンテクストなど、LLM が得られない種類の情報も多数含まれていて、それが言語獲得を補助する。しかし、こういった、入力の質と量の違いだけではなく、習得の方法論においても LLM とヒトの間に質的な違いが存在すると考えることができる。LLM は基本的に確率計算において最適化することを習得（トレーニング）の方法論の基本とし、おそらくヒトも同様のことを習得の際に行なっていると考えられるが、それとは別に、ヒトは rational animal として、入力となることばの裏に論理的な法則性を見出そうとすると考えたい（例えば Pinker, 1999 など）。すなわち、「こういう言い方はする、こういう言い方は普通しない」という経験に基づく確率的な習得方法に加えて、「なぜこういう言い方をするのか」という *why* question を自らに課すことにより、言語知識を調節する。その論理性の基本を成すのが言語理論であると考える。すなわち、言語理論とは、ヒトという rational animal が、言語知識を

蓄積する際に利用する装置だということである。もっと言えば、言語理論とは Chomsky (1965 など)の言う Language Acquisition Device (LAD)そのものだということである。

たとえば、英語母語話者のこどもが What do you want?とか Who would you like?といった文を言語入力として得ると、それをもとに言語知識を構築する際に、*wh* 移動に基づく分析を行う。

(10) 入力：*what would you like?*

→ 分析：

$[_{VP}$ like what]

$[_{T}$ would $[_{VP}$ like what]]

$[_{TP}$ you $[_{T}$ would $[_{VP}$ like what]]]

$[_{C}$ would$_j$ $[_{TP}$ you $[_{T}$ e_j $[_{VP}$ like what]]]]

$[_{CP}$ what$_i$ $[_{C}$ would$_j$ $[_{TP}$ you $[_{T}$ e_j $[_{VP}$ like e_i]]]]

こういった統語分析に基づいて、特定言語（この場合は英語）の文法（＝文を生成する関数）が設定される。この関数の外延にはまだ見ぬ以下のような文も含まれる。

(11) $[_{VP}$ hate what]

$[_{T}$ would $[_{VP}$ hate what]]

$[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate what]]]

$[_{C}$ that $[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate what]]]]

$[_{CP}$ what$_i$ $[_{C}$ that $[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate e_i]]]]]

$[_{VP}$ think $[_{CP}$ what$_i$ $[_{C}$ that $[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate e_i]]]]]]

$[_{T}$ do $[_{VP}$ think $[_{CP}$ what$_i$ $[_{C}$ that $[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate e_i]]]]]]]

$[_{TP}$ you $[_{T}$ do $[_{VP}$ think $[_{CP}$ what$_i$ $[_{C}$ that $[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate e_i]]]]]]]]

$[_{C}$ do $[_{TP}$ you $[_{T}$ do $[_{VP}$ think $[_{CP}$ what$_i$ $[_{C}$ that $[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate e_i]]]]]]]]]

$[_{CP}$ what $[_{C}$ do $[_{TP}$ you $[_{T}$ do $[_{VP}$ think $[_{CP}$ e_i $[_{C}$ that $[_{TP}$ Bill $[_{T}$ would $[_{VP}$ hate e_i]]]]]]]]]]

この文は派生ステップが(10)より多く、特に what の移動ステップが 2 回あるので、相対的に(10)より(11)の方に低い確率が割り当てられる可能性が考えられる。すなわち、実際の言語処理で what が文の 1 語目として入力された場合、統語構造としては、(11)のような構造が続くという期待は(10)のような構造が続くという期待より低く設定され、それが実時間文処理のパラメータの 1 つとして設定されるかもしれない。一方、(8g)のような非文法的構造は確率がゼロであるので、確率分布に貢献しない。

この仮説のもとでは、語用論に基づく派生理論も無理なく rational な言語獲得のプロセスとして理解ができる。すなわち、「書類を捨ててしまった」といった入力があった場合、それに対する意味分析が行われ、語用論的推論に基づく調整が行われる。

(12) 入力：書類を捨ててしまった

→意味分析：

書類ヲ捨テル＝話者が動作主

シマウ＝話者が動作主

→語用論的推論：

話者が捨てる行為をして、その話者がそれを取り返しのつかない領域に置くというのは、動機として設定しにくい

⇒シマウの動作主を削除

こういった言語知識の調整が行われた結果、テシマウ構文において意図性のない構文にも相応の確率が割り当てられることになる。いっぽう、テオク構文にはこういった語用論に基づく調整を行う動機がないので、意図性のある構文に確率のほとんどが割り当てられ、意図性のない場合について確率が割り当てられないと考えられる。これは構造の確率分布の設定における貢献であるので、語用論的推論も構造に対する言語知識の蓄積に無理なく参画できる。

4. 結語

本稿では言語理論における派生の概念の「無時間性」が、どのように実時間言語処理における「時間性」と矛盾しないで認知システムの中に位置づけられるかについて、考察を行った。まず、派生を含む構造の複雑性が予測処理における確率分布を決めるパラメータの１つを成すという Hunter (2019)らの主張を受け入れた上で、言語理論＝grammar は言語獲得装置 LAD によって得られる結果というより、grammar そのものが動的な LAD として確率分布の設定に貢献するということを主張した。すなわち統語論、意味論、語用論などはすべて、実時間文処理の確率モデルに寄与する言語知識の確率を駆動する、一種の獲得装置と考えるのが妥当なのではないかと結論付けた。

注

[i] このポスター発表（中谷 2024b）の詳細な内容については論文を準備中。

[ii] ただしテシマウの意味を「完了」とするのは適切ではない。これに

ついては、中谷(2024a)を参照のこと。

[iii] この用語の日本語訳としては「前提調節」が当てられることが多いようだが、accommodate は adjust というより adapt の意味に近いので、「前提適応」「前提順応」「前提適用」「前提受容」あるいは「前提調整」のような訳語のほうが相応しいと考えられる。

[iv] しかし近年は形式意味論から派生した語用論を実験的に検証する、いわゆる実験語用論 experimental pragmatics の隆盛が見られる（Noveck, 2018; etc.）。

[v] "The language is embedded in performance systems that enable its expressions to be used for articulating, interpreting, referring, inquiring, reflecting, and other actions." (Chomsky, 1995: 168)

[vi] "One component of the language faculty is a generative procedure (an *I-language*, henceforth *language*) that generates structural descriptions (SDs), each a complex of properties" (Chomsky, 1995: 167) / "The language is embedded in performance systems that enable its expressions to be used for articulating, interpreting, referring, inquiring, reflecting, and other actions. We can think of the SD as a complex of instructions for these performance systems, providing information relevant to their functions." (Chomsky, 1995: 168)

参照文献

Beaver, David Ian. (1997). Presupposition. In Johan van Benthem and Alice ter Meulen, editors, *Handbook of Logic and Language*, pages 939-1008. MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam. (1957). *Syntactic Structures*. Mouton de Gruyter, Berlin.

Chomsky, Noam. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.

Chomsky, Noam. (1986). *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Praeger, Westport, PA.

Chomsky, Noam. (1995). *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, MA.

Ferreira, Fernanda. (2005). Psycholinguistics, formal grammars, and cognitive

science. *The Linguistic Review*, 22: 365–380.

Hale, John. (2001). A probabilistic Earley parser as a psycholinguistic model. In *the Proceedings of the Second Meeting of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics*.

Hunter, Tim. (2019). What sort of cognitive hypothesis is a derivational theory of grammar? *Catalan journal of linguistics Special Issue*, 89-138.

Hunter, Tim. (to appear). Competence and performance. In Kleanthes K. Grohmann and Evelina Leivada, editors, *The Cambridge Handbook of the Minimalist Program*. Cambridge University Press, Cambridge.

Jackendoff, Ray. (2011). What is the human language faculty?: Two views. *Language*, 87(3): 586-624.

Levy, Roger. (2008). Expectation-based syntactic comprehension. *Cognition*, 106(3):1126–1177.

Nakatani, Kentaro. (2013). *Predicate Concatenation: A Study of the V-te V predicate in Japanese*. Kurosio, Tokyo.

中谷健太郎. (2015). 「テ形複雑述語の多義性をどう捉えるべきか～文法化アプローチと拡大合成アプローチ」『甲南大学紀要 文学編』 165: 99-112.

中谷健太郎. (2024a). 「テシマウは本当に完了のアスペクト形式なのか」岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也（編）『レキシコン研究の新視点 ―統語・語用と語の意味の関わり―』204-227. 開拓社, 東京.

中谷健太郎. (2024b). 「Presupposition accommodation の観点から見たテオクとテシマウの非対称性」ポスター発表, 日本言語学会 第 169 回大会 於北海道大学, 2024 年 11 月 10 日.

中谷健太郎. (2025). 「語用論的な意味はどこまで語彙項目の意味か：補助動詞テオクから考える」眞野美穂・小薬哲哉・江口清子・于一楽（編）『由本陽子先生退職記念論文集：レキシコン研究の広がりと深まり』427-442. 大阪大学出版会, 大阪.

Noveck, Ira. (2018). *Experimental Pragmatics: The Making of a Cognitive Science*. Cambridge University Press, Cambridge.

Ono, Tsuyoshi. (1992). The grammaticization of the Japanese verbs *oku* and *shimau*. *Cognitive Linguistics*, 3: 367-390.

Phillips, Colin. (1996). *Order and structure*. PhD thesis, Massachusetts Institute of Technology.

Phillips, Colin. (2003). Linear order and constituency. *Linguistic Inquiry*, 34, 37-90.

Phillips, Colin. (2006). The real-time status of island phenomena. *Language*, 82, 795-823.

Phillips, Colin and Lewis, Shevaun. (2013). Derivational order in syntax: Evidence and architectural consequences. *Studies in Linguistics*, *6*(1), 11-47.

Pinker, Steven. (1999). *Words and Rules*. Basic Books, New York, NY.

Potts, Christopher. (2005). *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford University Press, Oxford.

Sag, Ivan A. and Wasow, Thomas. (2011). Performance-compatible competence grammar. In Robert Borsley and Kersti Borjars, editors, *Non-Transformational Syntax: Formal and Explicit Models of Grammar*, pages, 359-377. Wiley-Blackwell, Malden, MA.

寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版，東京.

梁井久江 (2009)「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5, 15-29.

甲南英文学会 40 周年記念講演会報告

池本　陽向

1. はじめに

2024 年 10 月 26 日（土)、甲南英文学会 40 周年を記念して法学者・文化人の谷口真由美さんを招き、講演会「～谷口真由美さんと考える～ これからの社会を生き抜き、変えていくためのマインドとは」を開催した。以下は講演会の前半、谷口真由美さんの講演部分の内容をまとめたものである。

2. 自己紹介：谷口さんの「いま」

谷口さんは自己紹介を通して、特に若者に対し「あっ、なんか失敗しても、炎上しても生きていけんねや！何とかなるように持っていくってやり方もあるんですけれども、何とかなりますよ」というメッセージを伝えようとした。

若者に対して「名刺の裏とかに肩書きたくさん書いてる人間は信用したらダメです」と伝えている谷口さんだが、肩書きを並べたところ自身がその人であることに気づいたそうだ。2019 年 3 月まで大阪国際大学で 15 年間専任教員として勤め、思うところがあり辞めた。教員を辞めたことに関して谷口さんは、「なかなか大学の専任教員を辞めるっていうのは、清水の舞台なのか断腸の思いなのか、とにかく大変な状況でこれから先どうやって生きていこうかみたいな状況に陥ります。」と語る。主たる収入がなくなり、同年 6 月に離婚を決断、シングルマザーとして子供 2 人を育てていくこととなる。アカデミック界から排除されていくことなどを考えたときに肩書きがないということに怖さを感じたそう。しかし、捨てたら手に入っ

てくるものがあることに気づいた。45 歳から 49 歳までの間に 3 つの仕事を手放し、49 歳という中年期、家庭などを支えていかなければならない世代の中、全部を失っても半年ほどでなんとか食べていけるようになったことを自らの経験値としている。

数ある肩書きの中に、国際公共政策の博士がある。世の中、特に英米圏へは Dr.谷口という称号で行くこととなる。真偽は定かではないが、Dr.の称号があると英米系のエアラインはビジネスクラスに乗せてもらえるとか。「末は博士か大臣か英米系のエアラインのビジネスかと思っていたんですけれども、どれもちゃんとなれへんかったなっていう感じでした。」と語る。国際人権法やジェンダー法を専門とし、英米文学の中のジェンダー感に関しては仲の良い先生と意見を交わすことがある。

2024 年 3 月に 3 つの社団を立ち上げた。1 つ目は、「スポーツハラスメントゼロ協会」である。目指せ英語検定を目標に、スポーツハラスメント検定を作成した。スポーツ界から理不尽な指導をなくしたい、理不尽な状況にある子供を減らしたいという思いから立ち上げられた団体である。2 つ目は、「アスリートウェルビーイングアソシエーション」である。健康保険や社会保険の厚生年金がないアスリートが引退後困らないために、キャリアセンターを作って人物像や適正を探り、社会に出るまでのゆっくりできる時間を提供しようとする団体である。3 つ目は、「ビジネスと人権研究所」である。人権は気にしなくても良いというかつての会社の風潮が、現在のサステナブルを謳っている社会とは逆行しているため、人権基準を整えるために国際人権法など色々な分野で活躍する研究者の友人と共に立ち上げた。谷口さんはインタビューを何時間されても一円も支払われないといった、研究者の治験はタダだと思っている社会の姿勢

にとても腹を立てている。大学に勤めていた際、メディアから電話がじゃんじゃんかかり、「それ答えるより、私今授業行かなアカンねん」といった状況があった。「授業よりも大事なことはない。選挙がどうなろうが、今の目の前の学生さんの対応の方が私にとったら大事なんで。」と伝えても、メディアの人が「いや、一言で良いんで。例えば、情勢どうなると思いますか？」と食いついて離してくれなかったことがあった。その風潮は良くないと思い、「インタビューするならちゃんとお金下さい。知的財産なので、知的搾取をしないで下さい」ということを伝えていかなければアカデミアもサステナブルではないと考えている。「私たちは自分の知識のためにと経験のために投資をしてきているので、それを社会に還元することはもちろん大事なんだけれども、還元の仕方として搾取されるような還元のされ方であったならばちゃんと歯止めをかけなきゃいけない」という思いから立ち上げられた団体である。

他にも、立教大学の諮問委員、神戸学院大学の客員教授、佐賀女子短期大学の客員教授、部落解放・人権研究所の理事、日本ブラインドラグビー協会の理事、学会の理事、コメンテーター、新聞の連載などまだまだ肩書きはあるが、「たくさんあるからなんやねん」と一笑に付した。

3. 谷口さんのこれまで

その昔、花園ラグビー場のメインスタンドの下に谷口さんは住んでいた。元々競馬場として機能していた花園ラグビー場は、秩父宮の鶴の一声によりラグビー場に姿を変えた。谷口さん曰く「いかにも関西の鉄道会社が考えそうなこと」により、花園ラグビー場の地下空間には合宿所が存在した。その合宿所に監督コーチ陣の中から誰かが住む

ことになった折、1965 年から 70 年代初めまで近鉄でラグビーをプレーし、引退後にコーチとなった谷口さんの父、谷口一家が一番行きやすいということで白羽の矢が立った。「小学校 1 年生、6 歳のときに連れて行かれ、ランドセルを背負ってラグビー場から出て行くっていう謎な子供だったんですね。」と語る。同時期に近鉄バッファローズ、現オリックスバファローズ選手たちは藤井寺球場横のマンションに住み、「この違いは何！？なんでラグビーやったら、建物の下で、スタジアムの下で良くて、野球やったら隣のマンションなんねん。ほんまに扱い悪すぎるやろ。」と当時の大木監督に訴えかけ困らせたことを今でも覚えているそうだ。ラグビー場に住んでいたことから「ラグビー場の娘」と言われ、この経験が谷口さんの人生の転機になっていはく。

ラグビー場で生まれたと勘違いされることもあるラグビー場育ちの谷口さんは、小学校を転校した際ラグビー場住まいを同級生たちに信じてもらえなかった。証明のため下校時に同級生たちを連れてラグビー場へ帰り、ショックを受けて帰っていく同級生たちの様子を何度も目の当たりにすることもしばしば。

丼でビールを飲み、果ては洗面器でビールを飲むようなラグビー選手たちとの寮生活を「非常にマッチョな男社会の中で、男の論理の中で、男っていうのはなみたいな感じのシャワーを毎日浴びながら育った」と語る。そんな世界で育ったにもかかわらず、ジェンダーやフェミニズムを専門とする谷口さんにお兄さんは「意味がわからん。何をどうしたら、そんなこじれたんや」とコメントした。

ラグビー場地下生活を通して『強いは弱い、弱いは強い』を谷口さんは間近で見ていた。マッチョでムキムキなラグビー選手だが、手紙でフラれた際には「うえーん」と泣き、そのメンタルが試合に直結す

る。外ではすごく頑張った男という姿を見せつつも、そのマインドはものすごくしんどいという様子を垣間見たことで、谷口さんはその選手が厳しい練習に耐えきれなくなり脱走するかどうかが目を見て判断できるようになり、人を見る目が養われた。

強さを強調する男性の中身はしんどいと知ったが、大学で社会的には圧倒的に女性が不利で理不尽な状況が多いとわかった。谷口さんのお父さんは谷口さんとお兄さんに、「迷ったときは弱い方につけ。いじめられてる子がいて、『いじめられてる方にも問題あんのんちゃうか？』とか、そんなん考える必要ない。数が少ない方、それから体のちっちゃい方、男か女でいったら女、年寄りか若者でいったら年寄り、そういうものにつけ。迷ったら弱い方っていうので、それを庇うというのは、一緒にいじめられるかもしれんけれども、『いじめられたらなんやねん』っていう、家帰ってきたらちゃんとお父ちゃんとお母ちゃんがちゃんとしたる」と伝えていた。

学生鞄の中に鉄板が入っていたりとなかなかサバイブの大変な荒れた中学校に通う当時の谷口さんにお父さんは、「一対多数人であったときは、背中を壁にしろ。卑怯や言われても、砂蒔いたらええ。女の子は絶対おなか蹴ったらアカン。男やったら急所蹴ってもええ」と喧嘩の仕方を教えた。

時は経ち 2019 年、大学を辞め、離婚を経験したその年にラグビーのワールドカップが日本で開催され、日本のラグビー協会の理事になるという話が降ってきた。一大イベントをやるタイミングでの理事就任に関して。「そんな大きなイベントやるときに理事改選しちゃだめなんですよ。ややこしいてしゃあないと。前の人の引き継ぎもわからないし。で、新しくなったっていって『理事でございます！』言うて試合会場偉そうな顔で行くわけにもいかないし、ものすごい中途半端

な立場でありました」と語る。現在は改選時期が変更されこのような事態に陥ることはない。ラグビーのリーグワンの準備室の室長、リーグの参入審査委員会の委員長を経験し、その果てにラグビー協会を追い出された。

協会を追い出されたことに関して内部通報・公益通報として、『おっさんの掟「大阪のおばちゃん」が見た日本ラグビー協会「失敗の本質」』という本を執筆した。本の出版に際して、ラグビー協会はすでに辞めた谷口さんに対し懲戒処分の一種である譴責処分を出した。このことに関して、「辞めてるんですよ。今、井野瀬先生に譴責出せます？無理ですよね。そうなんです。だから、そんなあほな話ということを真顔でやっちゃうから、大丈夫かなって今も心配してます」とコメントした。

谷口さんが協会を追い出された理由に 1 つ心当たりとして 2021 年開催された東京オリンピック・パラリンピックに関するある出来事を取り上げた。組織委員会委員長の森喜朗氏から谷口さんは「わきまえない女」と言われた。発端は、森喜朗氏の「女性理事を 4 割いれなきゃいけないと、いまスポーツ団体は、これは文科省がうるさくいってるんですけれども。だけど、女性がたくさん入っている理事会は時間はかかります。で、これもうちの恥を言いますが、ラグビー協会今までの倍時間かかる。女性がなんと 10 人くらいいるのか今。5 人が 10 人に見えた。（笑いが起きる）5 人います」という発言にある。森喜朗氏がラグビー協会を「うちの恥」と述べた理由は、森喜朗氏がラグビー協会の会長・名誉会長を勤めていたためである。

しかしながら、森喜朗氏の発言にはフェイクが紛れ込んでいる。谷口さんが理事になるとき、森喜朗氏は任を退いていた。つまり、理事会に来たことがないため実際に「倍時間かかる」かどうかは見たこと

がない。さらに、実際「倍時間かかる」ということはなかった。なぜなら、第 3 水曜日の 17 時から 19 時までの理事会の後にはメディアグリーティングの時間が設けられており、いついかなる日であっても、メディア関係者が 10 人ほど待機しているため時間オーバーさせることはなかった。さらに、当時谷口さんは木曜日朝 6 時 45 分から始まる『おはよう朝日です』に出演しており、仮に「倍時間かかる」状況になった場合、出演できない状態に陥るがそのようなことはなかった。

谷口さんは森喜朗氏の発言に対して笑いが起きたことについて、「『女が入ったら倍時間がかかる』で笑いが起きるっていう。一緒にいてた人たちどういう状況だったんだっていう。この日本オリンピック、JOC の臨時情事委員会で評議員のメンバーで全部で 57 人いてそのうちたった 1 人女性がいらっしゃる場で発言されたので、ほぼ男性が笑ったということなんですね。『女性がなんやかんや』とかって言うんですけど、『女性を必ずしも増やしていく場合は発言の時間はある程度規制しておかないとなかなか終わらないから困ると言って誰が言ったかは言いませんけどそんなこともあります』と言われたんです。でも、『誰が言ったかわからない』ってむちゃくちゃ卑怯な言い方なんですね。誰やねん。つまり、ラグビー協会の誰かが、『女の理事入ったらややこしなった』っていいましたよねって。じゃなかったら、森喜朗さん知らないじゃないですか。見てないから。色々とわかってきたことで言うと、会議の場で『うわー、女性の理事増えた、やっぱりあの雰囲気変わりますね、議論も活発なりますね』とかって言われてたその中の誰かが森さんに『いやー、女はめんどくさいですわ』って言うてるわけですよ。身内にね、刺されたみたいなものなので、どういういことやと。」と語る。当時、谷口さんは新リーグの委員長を務めるなど、話題に上がった女の理事の候補 5 人のうちの一番目立

っていた。そのため、自分のことが言われていると感じたと振り返る。

谷口さんは、新リーグの委員長、準備室長をするためにメディアの仕事を全て辞めている。開幕に間に合わないということ、「あいつ片手間にやってるから、こんなに時間かかんねん」などという批判や悪口を言う人物がたくさんいることを理解した上での決断である。大学教員を辞め、その後メディアも全部やめたという状況で、2 つ目の肩書きをなくすことになる。

『現代用語の基礎知識 2022』（自由国民社）に谷口さんに関する記述がある。さらに、大谷翔平選手や BTS のイラストと並んで、似ているかどうかの微妙なラインをつく谷口さんのイラストが表紙を飾っている。記事の掲載やイラストで表紙を飾ることに関して谷口さんへの許可取りは行われていない。本人に掲載の許可を取らずに出版したことに関して、「書いてる内容が正しかったか正しくなかったか、自由国民社さん是非とも使ったんやったら一冊ぐらい送ってきて」と述べた。また、自身に関する文章を音読し、「『現代用語の基礎知識』にそんなええ加減なこと書いたらアカンと思うんですよ。聞いて。で、もちろん聞かれたら、『いや、ちょっとそれは』っていうこともあるかもしれませんけども、ちょっと面白かったですね、自分のことがこんな風に紹介される」とコメントした。

4. 谷口さんが定義する「おっさん」とは

ラグビー協会で活動する前、「おっさん社会に愛とシャレでツッコミを入れる」という目的の下、2012 年から 2019 年まで「全日本おばちゃん党」という団体で活動していた。「おっさん」とは、「ありがとう・ごめんなさい・おめでとうが言えない人」と谷口さんは定義した。

「ありがとう」に関して、「ありがとうっていうのはほんまに、あ

りがとう言うたらその辺の空気なくなんのかっていうぐらいありがとうって言わない人がいてるんですけど。大体皆さんプリプリ怒ってるときに『どうしたんですか？』って聞いたら、『あの人さ、別に言うてほしいとも思えへんけど、ありがとうって言われへんのかな』って聞くことがあるんです。そう。大体、ありがとうって言うてほしいんです、だからありがとうって言うたところで何の損も腹も痛まへんねんから言うたら良いのに、『あ・り・が・と・う』って口できへん人いらっしゃるんですね。どこに忘れてきたか知りませんですけど。そういう方いらっしゃいます。」と言及した。

「おめでとう」に関して、「大学って先生が毎年こう、4 月にプロモーションしたらですね、『准教授なられました〇〇先生です』、『教授になられました〇〇先生です』って、みんなで『おめでとうございます』とか教授会で拍手したりするんです。万年、勤めてた大学の同僚の先生で、准教授の先生がいらしゃって、その方が毎年 4 月、なんか偶々横になることが多いんですね、教授会で。むちゃくちゃブツブツ言うてはるんですよ、『アイツなんかろくでもないヤツやのに』とか『業績ないのに』とか『アイツはヒラメやのに』とかめちゃくちゃ言うてはるんですよ。『ヒラメって何ですか？』って言ったら、『地を這うように泳いでて、目、上にしかついてへんヤツや』っていうから『うまいこと言いますね』って言うてたんですよ。当時、入ったら大学は正面入って右側が学長室、左側が理事長室やったんで、『アイツはヒラメでアイツはカレイや』と目の付き方の位置で言ったら。『うまいこと言いますね先生』って言ってたんですよ。でも、その先生は『あんなんなったってろくなことないわ』とか『なったらなったで大変やのに』って言ってるんですけど、絶対『おめでとう』って言わないんですよ。その対象となった方が、すれ違っても、スッといなくなった

りとか、その方を観察するのが楽しくなってジーって観察してたんです。そうこうしてるうちに、あっ、これ、ジェラシーも混ざってんねんなってわかるようなってきて、嫉妬だなというのもあるなと、全部じゃないですけど、と思ったときに、嫉妬という字をおんなへんにすのやめてくれへんかなと。何であれ妬むとか嫉むとかね、大体嫌う、好きとか感情を表す言葉っておんなへんなんですよ。だけど、女だけがすなるものではないんですよね。そういう感情って。なので、おとこへんも作ったええねん言うてたんですけど、いまこのもうね性的マイノリティの人たちの、性別がどうやいうてへん時代やったら、もうにんべんでええやんと思い出したんです。でも、好きっていう字をもしにんべんにしたら仔羊の仔みたいな、こうおかしいなとか、なんか新しい文字作れればいいねんとかっていうのは、思ったりしていました。」と大学教員時代のエピソードと共に語った。

「ごめんなさい」に関して、「『ごめんなさい』って言ったら、人生負けとか人生終わる思ってんちゃうかみたいな人、そういう人のことをおっさんという風に呼んでました。女性でいうたらおばはんっていう風に言ってたんですけど。対極にあるのは、困った人を見たらほっとけない、まぁお節介失敗することもありますけど、失敗してもいいからお節介はした方が良い、困った人を見たらお節介した方が良いというのがおばちゃんとかおっちゃんやなという風に定義をしてたんです。」と述べた。

ラグビー協会の経験を通して「おっさん」はひらがなで書くようになった。谷口さんが執筆した『おっさんの掟「大阪のおばちゃん」が見た日本ラグビー協会「失敗の本質」』より、「上司や目上の人間の前では平身低頭、組織からはじき出されたくないので特に村の長には絶対服従。しかし、部下や下請けなど立場の弱い人間にはとにかく高圧

的。口癖は『みんながそう言ってる』、『昔からそうだよ』、『それが常識だ』という 3 つの思考停止ワード。理屈ではなく慣例や同調圧力で部下を黙らせる。とにかく保守的。IT を初めとする新しい技術や価値観には無関心。部下や若手からの提案に関しては『リスクが大きい』、『誰が責任をとるのか』と否定から入る。自分が退職する日まで勝ち逃げできれば良いので、組織が退化しても良いと考えている。若い人のために一肌脱ぐ何てことは地球最期の日が来てもやらない。そのくせ、『あれ俺詐欺』の常習犯。人の功績、部下の功績は自分の手柄、会社に何の貢献もしない割に目の前の帳尻を合わせて上司の機嫌を伺う要領の良さばかりがある。」と一部音読した。「あれ俺詐欺』とは、「あれ俺がやったんや」というもの。当事者にしてみると、「いつやりましたっけ？どこで関わってましたっけ？」と感じる発言のこと。スピンオフ版として、「あいつ俺が育てたってん」も存在する。これについて、「私もあの、結構たくさんいらっしゃるみたいなんです。私を育てて下さった方。覚えが無い人いっぱいいます。活躍したら途端に人が寄ってくる、活躍しなかったら途端に『いや、なんか一緒にいてていんけどあんまり』という風なこと言われる。この人生の両局面を私経験しておりまして。」と言及している。

5. 谷口さんの人生で大事にしている 3 つのこと

近年の谷口さんの活動として、2023 年 4 月、「ごきげんさんなまち大阪へ」という標語を掲げて大阪府知事選挙に出馬した。谷口さんは「思いあまって出たんですが、『お転婆をした』という風に言っていますが、実際はもう出ません。政治の世界はもうそれこそ大変やなっていうのがよくわかったので、もう二度と出ないですけれども、被選挙権の行使という私の中の人権の 1 つを使うことができたという意

味では、貴重な体験をしました。」と振り返った。また、企業、ラグビー協会、大阪大学のベストティーチャー賞と言われる大阪大学共通教育賞 4 度受賞などを挙げた。

知事選挙に出ると決めた際、ちょっとずつ戻ってきた仕事を再度全て手放すこととなった。谷口さんは、「手にたくさん抱えているときには新しいものは入ってこないなということなんです。手放して初めて空いたから、新しく紙袋持ってるとか新しいものが抱えられるっていう状況になるのかな」と述べた。

知事選でも標語として掲げられた「ふきげんさんよりごきげんさん」は谷口さんの人生のモットーである。ちなみに、子育てのモットーは「皆さんの愛で生きてます」である。谷口さんは自身の不機嫌を他者に伝播させないよう気をつけている。嫌なことがあったときは、「一旦ちょっと天井の高いお店で一息ついてコーヒーでも飲んでから帰るとか、何か自分がちっぽけに見えるような広い場所に行って深呼吸して帰るとかそういうこともしてました」と対処法を示した。子供にイライラをぶつけることはダメだと考え、機嫌良く保つために寝不足にならないよう心がけている。「寝るっていうのが一番のストレス解消なんです。寝るっていうお金何にもかかれへん一番良いストレス解消法を持っています」と語った。他のストレス解消法として、「一日に一個美味しい甘いもん食べる」というものを挙げたが、南海トラフが起きた際に現在の自身の体重では避難が難しいと考え、ジムに通い糖質オフのダイエットに勤しんでいるため控えているらしい。

谷口さんは自身のこれまでをなぜこの講演で振り返って紹介したのか以下のように語る。「私のやってきたことって何であれお話ししたかっていうと、失敗ばっかりなんです。もっと言うともっと若いときに遡ると、大学、入りたい大学にも入れてないし、ドクターの入試

もいっぺん失敗してるしとか色々あるんです。全部こう回り道してきてるんですけど、失敗ってネタでしかないんですよね。だから、その1年とか2年とかすごく大きく長い時間に感じるんですけど、たいしたことはないなと失敗って宝物っていうか、それしたから、新しいステップが切り出せるんじゃないかなっていうこともあって、なので自分を機嫌良く保つことと機嫌良く生きていくっていうのと失敗ってどうっちゃないなみたいな、ただ、ラグビー協会とか、知事選はまああれなんですけど、ラグビー協会のときをよく知ってる友人は、『よく命断たなかったね』って言いました。それぐらい、端から見たらもう、命なくしてもおかしくないぐらいの責められかたっていうか、追い込まれ方をしてたと、でもそれで『なんでどうもなかったん？』って言われたんですよ。寝てたから。ほんまそうなんですよ。なんかあの、下手な考え休むに似たり。そんなんなんか起きてたら考えるからほなもう寝るみたいなんとかその間にやっぱり本を読んだりとかして、ネタが一個増えたんは『三国志』とか『論語』とか、『兵法』とか呼んだんですよ。おっさんの思考をトレースしようと思って。大体持ち出すんですよね、『子曰く』とか、誰やねんみたいな感じで読んでたんで、読み直したんです。勉強し直した結果、こういうもんを大事にして引きずられてやれ何々やって訓示垂れてる人って大概ろくでもないなっていうところに行き着きました。だから、そういうものに対して突っ込みを入れて読むっていうのがストレス解消やねんって思ったんです。もちろん論語でも良いことって書いてあるし、人生の大事なときにもちろん英文学の諺とかもそうだと思うんですけど。自分にとってすごい大事な諺になることもあります。座右の銘になることもあるんですけれども。なんやこれとかっていうのをシェイクスピアに突っ込み入れるとかめっちゃおもしろいです。「それはないわ」

とかね。そういうことを言っていくっていうのが実はすごくおもしろいなと思いました。」とまとめた。

ここまで谷口さんの人生で大事にしていることとして「ご機嫌さんに生きていくこと」、「失敗て言うのは宝物ですっていう話」の 2 つを挙げた。さらに 3 つ目として、「どんな時でも人権大事に思う」を挙げた。これに関して、「私に人権があるように他者にもある。だから、ものすごく腹が立ったとしても、相手をほんとにすごい追い詰める尊厳を失うようなことはしないっていうのは戦いの中でもあの、おっさんとのやりとりとかでむっちゃ腹立ってもやらないように心がけています。私、言論界でいったらヘビー級やと思ってるんですよ。そのヘビー級のプロボクサーは、道行く人相手にスパーリングしないんです。それと一緒でヘビー級の話者だと思っているので、そんなちょっとね、話で戦い挑んできた人に『うわー！』って返して、こいつこうやった追い込まれるわすぐ泣くわとかってわかっても、やったらダメなんですよ。ていうその、自分の力を自覚するっていうことを思っているので、私も強者になるとき、例えば壇上に立ってるとか、教壇の上立って、上ってるときとか自分も強い人間なので、そういうときに自分の力の振るい方というものをきちんと理解する。自分の持ってるもの大きさを理解するということを心がけていくと何とかなりますっていう話をしたかったんでございます。」と締めくくり講演を終えた。

谷口さんは自身のこれまでを振り返りながら、約 1 時間の講演の中で「何とかなる」ということを我々に伝えた。笑いありの非常に興味深い講演となり、多くの聴衆が谷口さんの話に耳を傾けた。後に続く井野瀬先生とのクロストークも盛況で、40 周年記念講演は大成功で幕を閉じた。

甲南英文学会規約

第 1 条 名称　本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。

第 2 条 目的　本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を図ることをその目的とする。

第 3 条 事業　本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究発表会および講演会
2. 機関誌『甲南英文学』の発行
3. 役員会が必要としたその他の事業

第 4 条 組織　本会は、つぎの会員を以て組織する。

1. 一般会員
   - イ．甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
   - ロ．甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の（現・元）専任教員
   - ハ．上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
2. 名誉会員　本会の発展に著しく貢献した者
3. 賛助会員

第 5 条 役員　本会に次の役員を置く。会長 1 名、副会長 1 名、会計 2 名、会計監査 2 名、大会準備委員長 1 名、編集委員長 1 名、幹事 2 名。

2. 役員の任期は、それぞれ 2 年とし、重任は妨げない。
3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
4. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
5. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
6. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
7. 会計は、本会の財務を執行する。
8. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
9. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。

10. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
11. 幹事は、本会の会務を執行する。
12. 役員に事故がある場合、会長、副会長はその役員の職務を代行する。

第 6 条 会計　会計年度は 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間 3,000 円、学生会員については 1,000 円とする。

第 7 条 総会　総会は、少なくとも年 1 回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の 2/3 以上の賛成に基づき、承認される。

第 8 条 役員会　第 5 条第 1 項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第 9 条 大会準備委員会　第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会　第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学から若干名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条　顧問　本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和 58 年 12 月 9 日より実施する。
この規約は、昭和 62 年 5 月 31 日に改訂。
この規約は、平成 7 年 7 月 1 日に改訂。
この規約は、平成 11 年 6 月 26 日に改訂。
この規約は、平成 13 年 6 月 23 日に改訂。
この規約は、平成 17 年 7 月 3 日に改訂。
この規約は、平成 21 年 6 月 27 日に改訂。
この規約は、平成 22 年 7 月 3 日に改訂。
この規約は、平成 23 年 4 月 1 日に改訂。
この規約は、平成 28 年 9 月 11 日に改訂。

この規約は、平成 29 年 7 月 8 日に改定。
この規約は、令和 4 年 7 月 2 日に改定。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は Word ファイル形式（.doc または.docx）および PDF 形式で保存した電子ファイルを電子メールで編集委員長に提出する（宛先メールアドレスは甲南英文学会 HP: https://www.konan-u.ac.jp/hp/els で確認のこと）。メールの件名は「投稿論文」とする。和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスは 150～300 語程度とする。
3. 長さは下記書式に従った上で 20 枚程度とする。
4. 書式は以下の通りとする。
   イ．「ページ設定」は A5 サイズとする。
   ロ．「文字数と行数」は「行数のみを指定する」「25 行」に設定する。
   ハ．「余白」は上 25mm，下・左・右 20mm，ヘッダー15mm，フッター17.5mm とする。
   ニ．フォントは、日本語フォント「MS 明朝」10pt，英語「Times New Roman」10pt とする。
   ホ．タイトル・名前フォント 12pt，本文 10pt，参考文献 9pt とする。
   ヘ．注は原稿の末尾に付ける。
   ト．引用文には、原則として、訳文はつけない。
   チ．人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個書で原語名を書くことを原則とする。
   ニ．その他の書式については、文学・文化分野の場合 *MLA Handbook* など各自の専門分野にふさわしい書式に、英語学の場合 Linguistic Inquiry style sheet に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を 1200 字（英文の場合は 500 語）程度にまとめて、プリントアウトしたもの 1 部または PDF ファイルを Word 形式の電子データとともに大会準備委員長宛に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割り振りは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、原則として一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

ISSN 1883-9924

甲　南　英　文　学　　***No. 40***

令和 7 年 9 月 3 日　印刷
令和 7 年 9 月 18 日　発行

—非　売　品—

編集兼発行者　甲　南　英　文　学　会
〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8 - 9 - 1
甲南大学文学部英語英米文学科気付